### 放課後、彼女にキスしよう~あなたを誰より愛してる!

優美香

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト http://pdfnovels.net/

## 注意事項

囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致し ナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範 は「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒ テ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。 この小説の著作権は小説の作者にあります。 このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タ 小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。 そのため、作者また

# 【小説タイトル】

放課後、 彼女にキスしよう~ あなたを誰より愛してる

N0260X

【作者名】

優美香

## 【あらすじ】

近藤に涙目で訴えているように見えた。「よ、よ、よよかったら一 するつもりはありません。 として行くこと、 れています。かけがえのない存在の人へ 緒に行ってくれないかな」「え。別にいいけど」この会話が"運命 ら声を掛けられる。 に変わって行く。 陸上が大好きな近藤が、 丁寧に心の声に耳を傾けること。 その女の子は全身から必死さを漂わせながら、 近藤の初恋を主軸に、 極上の切なさと愛おしさをお届けします。 ある日の放課後に同じクラスの女の子か 児童虐待や少年法にも触 お互いがお互いを必要 単なる恋物語に

文体が変わりますことをお許しください】 【作者の未熟さ故、初回から少しずつ心理描写の密度等に合わせて

まとめて、こちらに載せております。 「ノクターンノベルズ」に載せている話を、回ごとにコンパクトに

## 近藤 1

子がいる。 晴れた日の電車の中。 長椅子に腰掛けている、 髪の毛の長い女の

高校の制服を着崩す事なく。

三つ折の真っ白な靴下を履き、膝を崩さないように。

車両の窓から暖かい春の陽射しが入って来る。

書の上で。 その女の子の頬を柔らかく照らし、 膝の上に広げている英語の参考

邪魔にならないように。何も言わず。

春の陽だまりは意志を持ち、時々、自分の方から身を隠しながら。

電車の中の皆にも平等な扱いをする。

時間を惜しむように唇を真っ直ぐにして、 参考書を見てる、 その

女の子の隣。

学生服の男の子がいる。

その男の子も、膝の上に参考書を広げていた。

学生服の片手は、 女の子の髪の毛を軽く人差し指に絡めている。

けど、視線は膝の上から動かない。

真剣な顔で頷きながら、 時々、 途中で少しだけ難しい顔になる。

あのさ」

男の子が呼びかけるけど。

女の子は気が付かない。

由佳、聞いてる?」

学生服に話しかけられた、 由佳と呼ばれた女の子の長い睫毛が、

ピッと揺れる。

なに

無愛想さ。 自分が聞こえていなかったにしては、 有得ない程の態度が大きい

で、由佳が学生服を見て。 無愛想そのものの顔で応える。

「聞いてる」

かもしれない。 邪険な返事の仕方は、 ふたりを知らない人が見たら、多分、 嘆く

だが、学生服の方は女の子の髪の毛から指を離して、 で参考書を見ているだけ。 真剣な顔つき

髪の毛から離した人差し指を、参考書に当てる。

「ここ、なんでこんな数字が出てくんの」

言ったきり、ずっと由佳の言葉を待っている。

「ああ、これね」

由佳の言葉が、じっと待っている学生服に注がれる。

女の子らしい白くて形の良い指が、 参考書の一点に触れる。

「ここ、この時の数字」

少し考え込んでいた学生服命

· あ、ほんとだ」

学生服の男の子の顔が、パッと明るくなった。

てつかわすー やっぱ、 その男の子が、 おまえ。 くしゃくしゃ すげえな。 うん、 の笑顔で、由佳の頭を撫で回す。 すごい!賢い !偉い

由佳は頬を赤らめながら、 口調だけは強がってみる。

「馬鹿にしないでよ」

学生服が素に戻った顔をして返事をする。

「してないよ」

由佳の心と体に言う。 由佳が一瞬、 言葉に詰まる隙を突いて。 学生服が、 真面目な顔で

大体、 俺。 由佳の事を馬鹿にした事なんか、 一回もないじゃ

た。 頬を赤くしたまま、由佳が学生服に唇を尖らせて文句を言い始め

んで。 「だいたい直樹は、 なんで、こんな簡単なのが、 いっつも難しい問題ばっかり解いてるのに。 分かんなくなるの?」 な

って誤魔化そう。 痛い所を突かれた学生服の直樹は思う。 しょうがない。 ここは笑

「いや、それはだねえキミ」

そんな男の見栄や体裁を、 由佳は簡単に打ち砕く。

生意気そのものの顔をして、 当たり前のように無愛想に言い切る。

「やっぱりいい。聞きたくない」

直樹は意に介さない。

· なんじゃそれ」

#### 一 瞬 後。

情けない顔をした由佳の

やめてよう近藤くん。 髪の毛、くしゃくしゃになっちゃうよう」

の声と

が流れている。 重なって。 直樹の、 電車の中には、 にやにやした顔で言う「許さん。 ふたりが降りるつもりの駅のアナウンス 直樹様と呼べ」 の声が

いつしか二人は、笑いながら電車を降りている。

# 季節は幾つか遡る。

高校一年生の時。

夏休みに入る少し前、 勇気を出して話しかけてみたのは由佳の方。

あ、 あ、 良かったら。 よっ、 秋葉原とか。 予備校の夏期講習に、行ってみたいんだけど。 あ、 ιļ よよ代々木とか、よく分かんないから。 ſί いい、一緒に行ってくれない...かな, ぁ あの。 ŗ

思ったのは 由佳が男子に話しかけるなんて、 恐ろしい事に挑戦してみようと

本当に、地理が分からなかったから。

たら困る.....。 (どうしよう、東京なんて。もう10年も歩いていない.....。 誰にも聞けない.....)

たまたま、 由佳が、 そう思っていた、 耳に飛び込んで来た陸上部員達の会話に、 おとといの放課後。 反応する。

「きめええええ!」

| ヲタ近藤。マジきめええええええええ! |

も頑張って.....」 うっせー !俺は、 メイドさんに話しかけて貰う為に、 部活も勉強

どうのこうの。 「俺はヲタじゃねえええええええ」

番後ろの席に座ってる、 あの人の声が聞こえる。

詳しいのかな? メイドさん???今の声、 やっぱり.... あの人だよね

詳しそうだよね.....。 メイドさん、って確かあの近所だよね?

よくわかんないけど、 聞いてみようかな.....。

冷たくされなかったらいいな、 でも、男の子に挨拶以外はした事がないんだけど。 変に思われなかったら良いんだけ

どうしよう.....。

どうしよう、どうすればいいんだろう.....。

うな気がする。 由佳は、そう思った。 でも、どうしても行かなくちゃいけないよ

どうしても。話しかけてみなくちゃいけないような気がする。 挨拶も交わした事がないかもしれない、あの人に。

だらいいんだよね。そこまで考えて、 確か、前にあった朝礼で校長先生に表彰されてた人。名字で呼ん 眩暈と激しい鼓動を感じる。

どきどきどきどき.....。

どうしよう、近藤くんって呼びかけたらいいんだよね。 だ、 大丈夫。

出来るだけ人がいない時に.....。

近藤に話しかけるタイミング、 ずっと狙っていた。

人が全然いない時って、 ちょっと無理だなあ.....。

せめて、今だったら大丈夫かな?

部活終了後。校庭の隅。

汗びっしょ りの顔を洗い、そのまま水を飲む近藤に。 斜め後ろか

ら近寄る。 近寄りながら、 骨っぽく広い肩幅と、

肉がバランスよくついている背中。 鍛えられ引き締まった腰の辺り 短パンから伸びる太腿や筋

に脅威も感じる。

だって女子には、 そんなガチッとした美しさはないから。

(ヒッチコックの映画みたいな雰囲気がする!)そう思ってた。 近寄ってくる異様な雰囲気。 近藤は、 恐る恐る振り返る。

そう。まさしく近藤はビビってた。

異様な雰囲気の塊は、由佳だった。

何?村田さん何か用? 俺 なんかの当番だったっけ」

異様な雰囲気を満々と湛えた由佳が、 んでいる。 外面では、 ぽかんとしながら、 タオルで顔を拭いている近藤に。 顔を引きつらせて、 必死で頼

よっ、 ぁ ぁੑ 予備校の夏期講習に、行ってみたいんだけど。 秋葉原とか。 よよ代々木とか、 よく分かんないから。 ぁੑ

よ、良かったら。あ、い。

い、いい、一緒に行ってくれない...かな,

あ、都合が悪かったらいいの!

最初から遁走するつもり。 体はその態勢を取っていた。

「え? 別にいいけど」

なんだそんなことか。

え、あ。あの。ど、どうもありがとう!

「うん」

の 日。 「委員長、 周りから「ヒューヒュー」 勇気の告白!」 と言う声が聞こえて来た、 どっと囃し立てる声が沢山あった。 あの日。 あ

言いながら、由佳の背中が逃げていく。「ち、違う.....」

近藤は呟く。 へんなの」

村田さんでも、 あの時の必死の形相って凄かった。 ああいう顔するんだね。 怖かったよー。

近藤の声が、 右の耳から入って、速攻で左の耳から抜けて行く。

向かい合わせにいた由佳は、実はその時、 固まっていた。

上手く笑えない。どうしよう。 なんて返事したらいいんだろう.....

道案内して、って言わなきゃ良かったかな..。

そう思っていたから。

近藤は、 日曜日のファーストフードの店の中。 にこにこしながら、 この話を繰り返す。

ら話しかけたことが、クラスメートには意外だったのかもしれない。 誰が見ても、 あの次の日、 男子を避けている由佳が挨拶以外で、男子に自分か ちょっとした騒ぎになった。

かせて鎮静させた。 近藤は、冷やかされる度「おまえ馬鹿だろ?」 と言い、 睨みをき

なんとなくだけど。

て。 なんとなくだけど。 いい加減に扱っちゃダメなんじゃないかなっ

それと、 やっぱ、 なんとなくだけど。 大事にしないとだめだなっ

直観したから。

自分の向かい側に座って。

ほんの少し前の「ビビった」事を、嬉しそうに、楽しそうに。 近

藤は繰り返す。

ましいな.....って、思う。 由佳は、そんな風に、 何回も何回も繰り返し話す、近藤の姿が羨

たまに見て知ってる。この人。

男の人だから、名前も覚えてるようで覚えてなかった。

今は、 部活の夕練中に見かける近藤は、いつも厳しい顔をしてるのに。 すごくにこにこしてる。 別人みたい。

トラックを走っている時の、この人。 すごく眩しいんだろうな...

:

やや切れ長の瞳、 陽に焼けた顔。のんびりマイペースな、この人。

かったら、 後ろの方から聞こえてきた朗らかな声が「メイドさん」と言わな 多分、 話しかける事もなかったんだな。

てくる。 自分に笑いかけてる、この人を見ていたら不思議な気持ちになっ

勉強なんか、どうでも良くなってくる。

屈託ない人だなあ。

あ、こっち見てる.....。

あ、でもね。部活の連中がね」

う、うん」

ねって。フフッ」 「委員長って度胸あるな、って。 あんな大勢の前で誘うなんて凄い

「委員長?」

たりしないし。 「村田さんのあだ名。ちょっとでもチャラい男には、絶対に口利い

それに服装検査でもアレだし」

「......そんなに硬いのかな」

「あ、ごめんね」

近藤は、申し訳なさそうに黙ってしまう。

ううん、大丈夫。こっちこそ、ごめんね」

眩しい人だなあ.....。この人って。

由佳は思う。

自分みたいな人といて、つまんなくないかな。

いい家庭なんだろうな、きっと。近藤くんの家って。 羨ましいな。

場所を探す。 今日みたいな晴れた休日 家で過ごすのは苦手。自分で自分の居

大嫌い、 と由佳は思う。 ..... あんな家庭、要らない。と。

分。 父は酒癖が悪く、 弱い者には見境がない。もう慣れた。 理解の範疇を超えて家族に力を振るう。 慣れたくないけど。 母や自

由佳は、自分の束ねてる髪の毛を見る。

生の中には、化粧をしている子もいる。 セミロング。ゴムで束ねてるのは、 引っ張られにくいから。 同級

行 く。 自分以外の同級生は、 高校入学してから、どんどん綺麗になって

凄いなあ.....と、思う。

私には無理だな……、いつもそう思う。

何をしたら、異性と付き合えるんだろう?彼氏が出来た」と嬉しそうな子も、ちらほら。

だけなのに。 男子なんて大人になったら、 きっと。 自分以外の誰かを脅かす

髪ゴムであったとしても。もう諦めた。 中で、日常を変えてみようとは思わない。 地味な黒いゴム。 変わり映えしない。 でもこれが一番いい。 例え、 たかが色付きの 家の

と時間。 愛されたいと思う事も。 分かりたいと思う事も。 何もかも。 淡々

それが一番楽だもの。

自分以外の人の顔色ばかり伺っている、そんな気がする。 親とは口は利かない。 特に機嫌の悪そうな時には。 いつのまにか、

い る 時。 られる。 家に帰りたくない。 とにかく避けたいと思う、 一日のうち、 その態度が気にくわない、 一番怖い時間は、家族が近くに と殴

るなら男がい 男に生まれていたら良かった。 いな。 もしも、 次に人間に生まれて来れ

.....近藤の話が、耳に入って来ない。

思って、 眼の前の近藤みたいに、 適当に相槌を打っている。 明るい人になれたらいいな。 そんな風に

った。 父に殴られている時、 唯一の救いなはずの、 由佳の事を護ってくれる事は、 母も頼りにできなかった。 度もなか

今でも覚えているのは「いい気味」の言葉。

気がする。 勢いだけで、 どうして私、 後先とか、そういうの。 近藤くんに声掛けちゃったんだろう? 全然考えてなかったような

少しずつ、少しずつ、畏れてゆくような胸騒ぎがする。

生なのに。 私の目の前にいる、この人の事を。どうしてだろう。 たかが同級

だかる異世界の人。 でも、ここにいるのは、 私の知らない世界の人。目の前に立ちは

額に汗が滲む。

こわばってくる自分の表情を、近藤がサッと眼の端で捉えた。

ない。 それに気が付いたから、何とか空気を変える。 近藤くんは悪く

眼をぱちぱちさせながら、問いかける。

あ、あのう」

「なに」

近藤くんって、兄弟いるの」

いるよ。妹2人と弟1人」

、ヘー。喧嘩とか、する?」

「するよ。 すぐ言う事聞くよ」 でも、 ちっちゃ いから。 ちょっと怒鳴って強権発動する

「.....殴ったり、する?」

即答された。きっぱり。

「なんで」

ないと」 「小さいだろ。 弱 い し。 自分より年下のは殴っちゃだめ。 大事にし

1

んだ。 ගූ んで、後輩は大事に厳しくするんだ。 自分も」 部活やってて良かったよ。先輩は先輩。 そしたら、 ちゃんとね、 ちゃんとする 立てる

ロボロこぼれ始める。 言葉を失って、 近藤を見つめていた由佳の大きな眼から、 涙がボ

どうしたの?」

ボロボロ泣いてばかりの、 びっくりした近藤は、 周りを見回し、 肩を叩く。 由佳の方まで来て。 俯いて

のままにして。 由佳の鞄と自分の鞄を肩に掛けて、 テーブルの上のドリンクをそ

「村田さん、大丈夫.....?」と。

外に出る。片付けは誰かがやってくれるだろう。 誰にも由佳の泣き顔を見せないように庇いながら。 近藤は急いで、

とにかくどこかで落ち着かせないと。 日曜日のここら辺は、人が溢れかえってる。その中を歩く。

に 下を向いて声を殺したまま、泣いている由佳が、よろけないよう 肩を抱いて歩く。

付くのを、待っていた頃を思い出す。 よく泣く赤ん坊だった妹を、抱いてあやしながら、泣き止んで寝 一番下の妹が生まれたばかりの頃。近藤は小学校6年生だった。

今している事も、変わらないような気がしてくる。 なかなか泣き止まなくて、てくてく夜の住宅街を歩いた。

路上では、誰も自分達の事は見てない。

が落ちて行く。 ひっく、ひっく.....、 肩を震わせている由佳の足元に、 時々、 淚

チないかな.....。ちょうど長椅子が、 雑踏を10分ほど歩いたら、人ごみを抜けて公園に入っ — 個。 空いてる。 た。 ベン

座ろっか。

「村田さん、ちょっと休もうか」

声を掛けて、 座らせる。 これで一つ片付いた。 次は.....っと。

つ てる。 少し離れた所で、 即席ミュージシャン達が、上手にバラードを歌

う。 夏の風が心地良い。 違う角度に眼をやると、 今日はあんまり暑くなくて良かったな、 踊ってる集団が3つ程あった。 と思

急に気が付いた。

由佳の肩から腕を離す。

由佳の返事は無い。ごめん」

馴れ馴れしくてごめん」

「だ、だいじょう.....」

る そんなに泣くような事、言っちゃったか?ようやく近藤が素に戻

まあいいか。これも日曜日の過ごし方の一つだ.....。

ごめんね、 バラードが2曲終わって、 そう言った。 近藤くん」 ごめん、 と繰り返す由佳に、 ようやく泣き止みそうな声で、 いいよ、と言ってやる。 由佳が

鼻水、かむ?」

「うん」

いだ。 ぐしぐし、顔を拭いている。うーん、 ごそごそと、由佳が鞄の中からポケットティッシュを取り出して、 こういうとこも下の弟妹みた

黙ったまま、由佳が顔を上げるのを待っている。

近藤は気が付く。

俯いた由佳の額の、 前髪を上げた生え際のところに青い痣がある

「村田さん、これ.....」

思わず触れてしまう。この跡は。

あ、と由佳が声を出す。

「殴られた」

近藤の声が震えてくる。だ、だれ」

親

聞きたくなかった。

それでも尋ねてる自分を、近藤は何故か止められない。

「いつ」

かも。 言葉を発した直後、 ぜんぶ。 近藤は悟る。 何故、 急に由佳が泣き出したの

おととい

夜? 頭って、下手したら。

うん。由佳が声を出さずに、首だけで答える。

掌を握り締める。 汗が出て震えてくる。 もう駄目。 心臓が痛い。

「はじめて?」

「違う」

うう、由佳がまた泣く。

その由佳の姿を見て、近藤も、 我慢しきれずに泣き出した。

マジかよ村田さん可哀想じゃんかよ」

俺んちの妹だったら良かったのに.....」

絶対、女の子は殴っちゃいけないのにぃ.....」

それを聞いて由佳が、ますます泣きじゃくる。

近藤くん、ごめんね」

心配させちゃって「ごめんね」と言いながら。

黄昏れて、なんとなく寒くなってきてから。 二人が眼を真っ赤にして、ようやく落ち着いて来たのは、 辺りも

人の数も少なくなった。

ないとな。 陽が落ちると、 ますます寒いだろう。 近藤はそう思う。 早く帰ら

ミュージシャン達も、いなくなっていた。

今日は、もう帰ろう。来週、また来よう」

近藤が話しかける。由佳が「うん」と言って、立ち上がる。

ありがとう近藤くん。 本当に、ありがとう」 私ね、近藤くんと、今日、来て良かった

スカートの埃を払いながら、由佳は照れ臭いけど言う。

くれる。 だって、それまで話したことなかった人。こんなに私にして

「俺も」

来週、予備校あったっけ?」

「なにオマエラ(初デートに制服で行った訳?」

「だっせー!」

「激しくダサい!」

んで何なん。そんなに眼を腫らしちゃって」

その場で速攻フラれたんじゃねえの」

「うるせえなてめーら」

翌 日。 まだ少し眼が腫れている近藤が同級生を睨みつける。

「しょうがねえじゃん、だってさ。

んだもん」 委員長ったら「学生として行くんだから制服よっ!」とか、 言う

<sup>・</sup>今から尻に引かれて、どうすんだ?」

「てめえらぶっ殺すぞコラ」

いる。 朝練が終わって近藤達が、 朝早い日直の仕事がある由佳が、 教室で着替えている最中に 引き戸越しにその会話を聞いて

なる。 あれってデートになるのかな?と思う。 知らないうちに頬が赤く

......早く入りたいな、どうしよう。

引き戸を開けて入る勇気がない。 いくら「日直」という大義名分があっても、 どうしても。 着替え中の男子の中

引き戸を開けてくれた。 立ち止まっていると、 人の男子が「なにしてんの」と言いながら

嫁が入れなくて困ってんぞ」

なんとなく気になって、一番前の席の由佳を見ていた。 2時間目の途中から、近藤は一番後ろの席から

「日直か」

3時間目が終わってから黒板の字を消している由佳に、 後ろから

話しかけてみた。

村田さん、村田さんってば。

一心不乱に黒板を綺麗にしていた由佳が、二回目でようやく気が

付 く。

「今日、日直なんだね」

「うん」

「5時間目、美術だろ」

「うん」

「荷物多いから、手伝うよ」

由佳の動きが一瞬止まる。

「えつ」

階段、危ないし」

「あ、ありがと」

怪我したら大変だろうから」

近藤が居なくなる。それだけ、由佳の背中に話しかけて

う、うん」

うに。 由佳の全身が赤くなる。 指の先まで。 どうか誰も見ていませんよ

廊下に出ていた。 昼休み、由佳が立ち上がった時に、 近藤も立ち上がって

| 人懐こい笑顔で、由佳の眼を見て笑う。| 村田さん、声かけてくれたっていいじゃん」

「あ.....。ごめん」

いいよ

す。 行こう、 隣の校舎だから時間かかるし。 そう言って近藤が歩き出

美術準備室は、一年生の校舎からは遠い。

準備室のある三階まで、 階段の踊り場に「足元注意」と、 教材を持って歩く女子が、 階段を昇り降りしないとならないので 階段で滑って転ぶ事も、たまにあった。 書いてある貼り紙が有る。

める。 二人は、 黙ったまま歩いていた。 準備室の引き戸を開け、 また閉

由佳にプリントの束を持たせ、 近藤は大量にある模造紙の束を抱

由佳の眼が泳ぐ。

あ.....。ありがとう、って言いたいのに.....。

近藤が、さっさと動いてしまうから、言えなくなってしまった。

て言った。 階段を下りて行く、 その途中。急に近藤が、 隣の由佳の方を向い

「あのさ」

なに

「今日、俺んち来いよ」

え

つうか、来て。勉強しようよ」

「は?」

「一緒に勉強してください。 俺 進学したいのよ。 親父の跡を継ぎ

たいから。

でも数学が苦手だし、

教えて」

「いいよ」

「なんかさ」

「なに」

昨日と全然違くね?」

階段の踊り場で、ピタッと由佳の足が止まる。

だって..

اراار 学校だもん.....」

困ったような由佳の声に、近藤が屈託なく笑った。

悪いけど、 部活終わるまで待ってて」

よかった」

近藤が来た。 部活が終わるまで、 由佳は校門の近くで近藤を待っている。

ごめん遅くなった」

うん」

ふたりとも黙って歩く。

こっち、ずっと歩くと俺の家なんだ」

そう」

近藤が、 自分と歩調を合わせて歩いてくれているのが、 由佳には

分かる。

(申し訳ないな...)

横を見ると、近藤本人は、 時々口笛を吹いている。

突然、 話しかけられる。

あのさ」

なに」

来た。 近藤は、 にこにこしながらこっちを見ている。 額に汗が浮かんで

「何か部活、やってた?」

「え....っと」

なに?」

由佳の顔が赤くなる。

「き、きしょう」

「 え ?」

「天気図、書くの」

ええー、凄いな!渋いわ、それー」

近藤が笑い出す。 由佳の顔がますます赤くなる。

、ひ、ひどい」

必死で言ってみた。

ごめんごめん」

屈託のない笑顔に、吸い込まれそうになる。

' どんな事するの?」

「ラジオを聴いて、天気図に書き取って行くの。どこそこ、 何ミリ

バール、とか」

「それで?」

光とか分かるから、 「何となくだけど、 季節によってね。 それが楽しくて」 空に吹く風の向きとか、 陽の

近藤は、しみじみ言った。ヘー」

俺はさ、 大陸や海を渡る風の色が見えるって言うの?そういうのもいいね 走ってる時の背中に当たる風しか分からないけど。

この人、本気で、 そんな風に言ってくれてるのかな。

でもね、すっごく地味だよ?」

「 何 が」

えない」 「短波の男の人の声と、字を書いてる音と、 紙をめくる音しか聞こ

<u>`</u>

この人の鞄は、 普通の女の子なら、 相槌を打ちながら、 味も素っ気もない、 近藤は由佳の鞄を見ていた。 いっぱいマスコットを付けてるのだろうけど 単なる学生鞄だ。

ふっと思った。

「あのさ」

「ひに」

「誕生日、いつ?」

え?

村田さんの誕生日」

由佳の頬が、また赤くなる。

な、なんで?」

赤くなった頬のまま、近藤を凝視する。

近藤は、 くしゅくしゅにしてやりたくなる。 一瞬、立ち止まって、そんな由佳の髪の毛を

「聞いちゃだめなの「誕生日くらい」

そうじゃないけど.....。近藤くんは?」

「俺?」

「うん」

「7月30日」

「私は7月4日」

あ!終わっちゃってるじゃん...」

うん」

終わってたらしょうがないなあ.....、 近藤は首を振る。

「ごめんね」

いや、そうじゃない。 ぁੑ 今度また、 一緒に出掛けようよ」

え、いいの?」

由佳の眼が丸くなる。

ぷっ。そんな。 まるで黒船が来た時の日本人みたいに」

「やだあ」

由佳が笑い出す。

・近藤くんは夏休み中だね、誕生日」

うん、今年も大会にぶつかっちゃって」

· そうなんだ」

夏休みさ、もうすぐじゃん。どっか行こうよ。今度は私服で」

はっきり次の約束を取り付ける前に、 近藤の家に着いてしまった。

二つのドラフターとパソコンが2台あった。近藤の家に入ると、広いリビングには

これ何?初めて見た」

ドラフター」

...ドラフター、ね」

由佳が復唱する。

「そう、 ドラフターって名前。 図面を引くんだよ。大きいよね、 こ

情になった。 近藤が言って、 白い斜めの盤の上をコツコツ叩く。 誇らしげな表

全部パソコンで出来るから。これ、今、ホントは使わない。

でも親父は「初心を忘れちゃいけないから」 って

ふしん」

勉強しよ、ちょっと待ってて。

そう言って、近藤は部屋の壁に有った折り畳み式のテー てきぱき器用に広げ、 台所から椅子を二つ持って来る。 ブルを

ありがと」 一人で黙って教科書や問題集を広げて、 礼を言って、 向かい合わせに座る。 黙々と勉強する。

辞書をめくる由佳を、 時々、 近藤は気付かれないように見る。

な。 大きな眼。 睫毛。 前髪が、 つやつや光ってる。 染めた事ないんだ

首を傾げて考える、シャーペンを持っている指先。 何かに没頭し始めると、 キュッと唇を閉める。

かった。 勉強なんて口実に決まってる。ちょっとでも、 側に置いておきた

あの時、どうしてキスできなかったんだろう?

公園で泣いていた由佳の事。

すごく小さくて柔らかくて、頼りなくて。

キスくらい、 すれば良かった。 そしたら今頃は.....。

不謹慎だな俺....。

確かめたかったな.....。

もし村田さんが許してくれるなら.....。

りたいな。 大事に、 誰にも触れさせないように。 こんな風に時間を作っ てや

欲しいな.....。 全部....。

本をめくる音と、 時計が秒針を動かす音しか聞こえなかったリビン

誰かが帰宅してきた音が響いた。

える。 由佳が、 ぁੑ と声を発した。もう、そんな時間?と独り言が聞こ

「おにいちゃん、ただいま」

上の妹だった。 結構、 背が高くてランドセルが小さく見える。

「おかえり」

「お邪魔してます」

由佳が挨拶した。

「こんにちは」

妹が由佳に挨拶した。

おまえ、さっさと上に行け。邪魔だ」

近藤の心臓が、何故かバクバクしてきた。

「おにいちゃん、今日、何か変だよ?」

妹がニヤニヤしながら、返事をする。

いい名前だね」

うるさいよ。あ、

これ、上の妹。奈津子って名前」

由佳が笑う。 えー?全然、 そんな事ないですーぅ、

そう返事をした奈津子は、 照れ臭くなったのだろう。 自分の部屋

に向かって行った。

一今、5年生くらい?」

由佳の問いかけに、近藤が答えた。

6年生」

- 「へえ、結構、背が高いんだね」
- 「ああ、そうかな。今、水泳やってるよ」
- 「スポーツー家?」
- ふふっ、と笑う。うわ、 こいつ可愛いな。 近藤は再び勃起する。
- 「あ、ああー、どうかな。突然変異みたい」
- 突然変異?」
- うん、親父も、母親も運動音痴なの。 なんとなく、下二人も、 続いちゃったって感じ」 でも俺が陸上やってたから
- ふたり?」
- <sup>゛</sup>うん、弟も水泳やってる」
- `ふうん。今、いくつ?」
- 「8歳。今、2年生」

近藤が椅子に座ったままで、 大きく背伸びをした。 壁の時計を見

- る。4時だった。
- 「あとは妹さん?」
- 「そうだね。そっちは4歳」
- じゃあ、スポーツは、まだまだ先だね」
- なんとなく、そのまま会話を続ける。
- ちゃんと挨拶も出来て、運動もしてて。 ι 1 ι 1 ね そういうの」
- まあね。家族を誉められると嬉しいね
- あ、そう言えば。村田さん。 お茶、 飲まない?」
- 近藤が立ち上がった。
- いいよ、そんなの全然」
- 由佳が慌てて、そう言った。
- 俺が咽喉、渇いたから。 い い の。 村田さんのは、 ついでだから」
- ゙あ、ごめん.....」
- 「謝らないでいいよ」
- 飄々と眼の前から消えてしまう。

どうしてだろう。 いつのまにか寛いでいたみたい。 由佳が一人で

赤くなる。

ガラスのコップを御盆に載せて現れた。 しばらくして、 近藤が2リットルの緑茶のペットボトルと

由佳の眼の前に、ごく普通にコップを置いて、ごく普通に注いで

くれる。

「あ、ありがとう……」

由佳は、つっかえながら礼を言う。

· どういたしまして」

近藤が自然に返事をした。

え、近藤くんって、そんな事まで言うの?

由佳が、ビックリしたような声を出した。

'え、何で?おかしい?」

だって、普通の人って言わないと思う.....」

近藤は照れ臭くなって、笑いながら言った。

なんかさ、俺が行ってた保育所ね。

園長先生が、そういうの厳しかったんだってさ」

-?

おはよう、いただきます、ごちそうさま、 ありがとう、 どういた

しまして。

ごめんなさい。<br />
とかね。

ちゃんと言わせる教育方針だったらしいよ。

仕事が終わって、俺を迎えに来た母親が、それ見ててさ、

家でも、俺に言わせるようにしたんだって。

確かに家に客が来る機会が多かったから、 そういう言葉って使え

るよな」

使える、って?」

「大人がさ、誉めてくれるだろ」

そこまで言ってから、近藤は頬を緩める。

「たまに小遣いとか貰ったりね」

` **` |** ......

私が、そういうの意識したのは、 つい最近だったような気がする

:

眼を丸くしたままの由佳を見て、近藤が大声で笑った。 ちゃんと躾が出来てる人って、 いいなあ。

村田さんの前で、 緊張しなくなったら、 俺 多分、言わなくなるよ」 ホントは緊張してるんだよ

そ、そうかなあ.....」

そんなもんだって。再開しようか、 おべんきょ」

うん

ちょっと空気が砕けた。これでいいか。 近藤は思う。

近藤が壁の時計を見た。もう6時だ。

「村田さん」

「はい」

下を向いて、 一生懸命、 何かを書き取っていた由佳が顔を上げた。

物凄く素直な声に、 近藤はたじろぐ。 4歳の妹でさえ、 そんな良

い返事はしない。

「そろそろ、帰る?」

あ

由佳が壁の時計を見た。

「うん」

家の方、大丈夫?.....ごめん、こんなに遅くなって」

「うん、大丈夫。ありがと、ごめんね」

寂しそうに笑った。 近藤の胸が潰れそうに痛くなる。 なんだこれ。

首生

こっちまで寂しくなるじゃんか。

「あ、あのさ」

なに」

·あ、明日も来て貰ってもいいかな」

え

「だめかな」

違う、そういう意味じゃない」

え

由佳の顔が、段々赤くなる。

ほんとに?いいの?」

由佳の顔に貼り付いている

本気で そんなこと 思ってるんですか!, みたいな表情が

妙におかしくて、心底からゲラゲラ笑ってしまう。

「あのさあ、 何だかホントに。 未開の土地の人間と喋ってるみたい

だよ

面白すぎるよ、村田さんって」

ぽかん、 とした表情の由佳に続けて近藤が言った。

「だって、夏休みに一緒に出掛けるんだろ?」

-あ

それなら別に、 こうやって家で一緒に自習する位、 いいじゃ

ほんとだ」

由佳が、ようやく表情を崩した。

「明日も、来て」

うん」

二人で、テーブルの上の本やノー トを片付けながら話す。

そういえば、 夏休みの約束って、 まだしてなかったっけ」

うん」

「どっか行きたいとこ、ある?」

ま、まだ先だよ?」

先に予定入れて置かないと、俺が困る」

嘘だった。 近藤に、部活以外の用事なんか何にも無い。

それでも、 由佳は真剣な顔をして、 少し考え込んだ表情になる。

「水族館かな」

わかった、じゃあ、そこにしよう」

うん

さっき持ってきた、 にっこり笑った顔の由佳を見て、近藤はようやく満足する。 コップも片付けて、テーブルの上が空になっ

近藤は、 それを器用に畳む。 由佳も、 椅子を台所に返しに行った。

用紙を置いても テーブル、と言っても結構ゴツい。 父親が、 その上で何枚か製図

充分、 図面が引けるように、 職人さんに頼んで作って貰ったもの

だ。

二人で向かい合わせになって、 150センチほど幅がある。

' 駅まで送って行く」

うん」

近藤の言う事は、 素直に受けてもいいのかな...、 由佳は思う。

## 外に出て、駅まで二人で歩く。

黙って歩いてるけど、 街の中は、 ほんのり、 気詰まりな空気は無かった。 夕餉の匂いがする。

り始めた。 言えないまま、ありがと、と早口で言った由佳が、 近藤は一つの言葉を、何度も心の中で繰り返す。 駅の階段を昇

いいえ、と言ったまま、その背中をずっと見ている。

半分、 途中、 泣きそうな顔をして、こっちに向かって手を振った。 由佳が踊り場で振り向いた。

泣くなバカヤロ。

近藤は、 わざと眼を逸らして、そのまま振り向いて歩く。

あれくらいで。

バカヤロ。

## 明日が終業式という日の夜。

近藤は、 何か動作をする度に、 ぼうっと考えている。

由佳が見せてくれた表情の、一つ一つを思い返す。 初めて一緒に帰ったり、駅まで送ってやったりしてた時間に

つ 駅の階段の踊り場で振り返った時、 眼を丸くして頬を真っ赤にして、 あの顔。 俺を見てた、 俺を見た瞬間に泣きそうにな あの顔。

そんなに人に甘えてなかったのか。嘘だろ。

自分には物心ついた時から既に、下に妹がいたし、 次々に弟、 妹

が増えても

いた。 面倒を見てやったり、 何かと庇ってやるのは当たり前だと思って

だって自分も、 彼等が出来ない事を手伝って、出来るようにしてあげる。 親から、そういうふうにされて来たもの。 順繰り

それだけの事じゃん。 違うのか?ほかの家って.....。

にしてるだけ。

今日だってそうだ。 たまたま、 冷蔵庫にケー キがあっ たから出し

てやったら

位は食った事ないのか。 わー」とか言って眼を丸くしやがって。 オマエ今迄、 生涯に一 回

一回はあるだろ。 たかがショー トケー ・キじゃ h 苺が乗ってる、 よくあるア レだよ

しまうじゃないか。 こっちだってそういうの見たら、 それを.....。 あの人は本当に、 心の底から嬉しそうにする。 何だか哀しくなるほど惹かれて

る 緒に出掛けた翌日から、 毎日一緒に帰り、 リビングで自習をす

て行く。 黙々と本をめくり、 ノートに字を書き写し、 決まった時間に送っ

夏休みどうしよう.....。来て貰えるかな.....。

大会とか、記録会がない時だったらいいかなあ.....。

ルを見ていた。 無表情に、つ まとわりついて甘えてくる4歳の妹を膝に乗せたまま いさっきまで、 由佳が座っていた椅子や折畳テーブ

ああ、 おにいちゃ ごめんね。 hį なにみてんの」 にいちゃん、 ちょっと勉強するわ」

不服そうな妹を、 ぎゅうっと一回、 抱きしめてから立ち上がる。

うなんだろうな。 ... 柔らかいな 女の子って。 ध् 村田さんもそうなのかな。 そ

肩の感触は、正直あんまり覚えてないな..。

自分の部屋に入って、ぼうっとしたままベッドに寝そべる。

たぶん.... 俺は、 個だけ、 もう言えない。 あの人に大きな嘘をついている。 懺悔も出来ない.....。

そう思いながら、 自分の掌を股間に動かして行く。

止められなかった。

由佳って、呼びたい.....。

あの人の事を、 本当はリビングじゃなくて、 自分の部屋に入れた

l ....

そして、ここで。その髪のゴムを取ってやって、それから.....。

胸が苦しい。言えなかった大きな嘘の光景が蘇る。

おととしのちょうど今頃。 小遣いを貯めてタミヤのプラモデルを

買った。

日本海軍航空巡洋艦、最上。初めて秋葉原で観て、感動したもの

だ。

初めて観た時から欲しかった。手に入れる迄には3ヶ月かかった。 勇壮なフォル ムに相反して、繊細なパーツの造りの数々。

たはずだった。 元々は、部活で使うシューズやウェアの新作が見たくて、 出掛け

程、それに魅せられた。 それでフラフラ歩いていた時に、最上に遭遇したのだ。 衝撃的な

ちょくちょく店に通って、いつまでも眺めてた。

祖父がそういう、軍用船舶の写真を沢山持っていたせいもあるか

もしれない。

シューズのお金は最上に消えた。

少し足りない分は父に出して貰い、 塗料も、 筆 も、 全部揃えた。

夏休みは、 部活でタイムを上げる事と、 プラモを仕上げる二つの

事に没頭して終わった。

自分で全部、 塗装もして乾燥もさせて、 丁寧に丁寧に作った物。

何冊か事典を重ねて、 完成した日の晩、 ほくほくしながら、 リビングのテーブルの上に

そこに置いておいた。

唯一にして、 最大の失点。 ガラスケースを買ってなかった事。

っていた。 学校から帰ったら、それが粉々になって、 リビングの床に散らば

とした後、破片の数々で遊んでいた。 2歳になった妹が、 珍しかったのか、 何かの家具に登って床に落

粉々だった。 バキッと割れた船体、 一生懸命に付けたマストや甲板。 何もかも

かってくれる託児所が決まる、その前日だった。 母が父の仕事を手伝う事を再開する為に、 妹を、 夜の7時まで預

呆然として、その光景を見ていた自分の目の前。

りながら。 それらを母が、 オロオロしながら片付けている。 何遍も自分に謝

た。 妹は破片の中で、 一つを手に取りながらキャッキャッと笑ってい

た。 カッとなって前に二、三歩踏み出し、 何も言わずに妹を殴りつけ

訳が分からず泣き出す妹を、 更に殴りつける。 母が止めに入った。

その母を、 振り飛ばすように追い払い、 もっと殴る。

「この野郎」

続ける。 訳が分からずに殴られ、 怯えて震え、 泣きながら拙い口調で謝 1)

て 妹の、 滅多に怒った顔を見せない自分を見て、 ようやく止めた。 その顔に興奮して、 また力ずくで殴りつける。 泣き出した弟に気が付い

かった出来事。 あの9月。 たっ た一回だけ、 たった一回だけの事。 由佳に言えな

まくり上げている。 想像の中で、近藤は、 由佳の名前を呼びながら、 既にスカー トを

いや!」 それまでは恥じらいながら頬を染めていた由佳が、 両腕で拒む。

ける。 それを無言で唇で塞ぐ。 由佳の腕を、 片腕で絡め取って押さえ付

そしてこの俺は由佳の大事な所.....、それは既に知っていた。 もう片方の手で、乱暴にパンティを膝まで降ろす。

悲鳴は上げさせない。 深々と刺しながらパンティを降ろしたばか 近藤は想像の中で、由佳をがむしゃらに自分のものにする。

りの手で、由佳の頬を逃げないようにしてるから。 から当然、 ちょっと俺に話しかけられただけで、 経験はないだろう。 あんなに頬が赤くなるんだ

た。 あ の時の妹の顔が、 急に浮かんできた。 近藤は大量に射精してい

· ああ.....

襲ってくる。 深い溜息をついて、 ベタベタした精液を拭う。 猛烈な自己嫌悪が

まだ恋人同士でもなんでもないのに.....。

ごめん.....。

をこなす。 終業式の日。 朝練は通常運行。 近藤は、 いつものようにメニュー

顧問が合図をして、 終了になるまでは手抜きをしない。

面を蹴る。 走る事は好きだ。 何も考えなくていい。 ただ前に。 脚を上げ、 地

れている。 その繰り返し。 基礎トレも嫌いじゃない。 近藤は中長距離を任さ

今日。 ホイッスルの音が長く響く。 終わりだ。 そう言えば、 俺が日直か。

の中、 くたくたになって校舎に帰る途中、 由佳を見つけた。 ちらほらと登校してくる生徒

「おはよう、村田さん」

さく手を振る。 手を振ったら、 立ち止まってくれた。 にこっと笑って由佳が、 小

**゙ぉはよう」** 

'今日、早いね。何かあったっけ」

まだ8時だ。 いつも由佳は8時20分頃に来てるはず。

うん、 ちょっとね。 まみちゃ んに数学教えてって言われたから」

「横山?」

「そう」

図書室で」

「寄りたいけど、無理かなあ....

だった。 横山は、 同じクラスの女子だった。 確か、 近藤と同じ中学の出身

成績はいつも学年で、 あまり出しゃばるタイプの人ではなかったから、 5番以内に入っている横山が?勉強教えて 第一 印象は薄い。

貰うの?誰かに???

怪訝そうな顔をした近藤に、由佳が言う。

、私も、彼女とは話がしたかったから」

そうなんだ」

うん」

そっか。あのさ、水族館」

うんし

頬を少し赤く染めた由佳が言う。 近藤の眼を、真っ直ぐ見ながら。

ちゃ んと、 約束は憶えてる。 いつにしたらいい?」

帰りに決めよっか。 俺、 今日が日直なんだ。 先に行く」

「うん」

駈け出した近藤の背中を見送る。 背中.. 広いな。

教壇の脇で、 近藤が慌しく、 同級生の男女が抱き合ってキスしていた。 いつものように教室の引き戸を開ける。

(うおっ!)

替えた。 体を離した二人の顔を見ないようにして、 自席に就いて手早く着

そして、 学級名簿を職員室に取りに行く。 (マズイもの、 見ちゃ

ったなあ.....)

廊下を早足で職員室に向かって歩いていると、 由佳が対面から歩

いて来ていた。

近藤は立ち止まって、呼びかける。

「村田さん」

「なに」

「今日、部活ないから。早く帰れるよ」

「ほんと?」

由佳の眼が嬉しそうに光る。 うん、 ほんとほんと。

そう言ってから職員室まで、ダッシュする。

部活の顧問に「コラ!」と言われた。 気にしない。

俺も村田さんとキスしたい。 顔中いっぱい舐めるように、 キスし

たい。

モヤモヤしつつ時間が過ぎて行く。

近藤と由佳は、 ここは近藤の家のリビング。それも、 いつものように、 向かい合わせで自習している。 いつもと同じ。

数学の問題集を広げながら、近藤は考えている。

... 今朝、 俺が見ちゃったのって?あれ、 もしかして陸上部員か?

多分、男の方は隣りのクラスだろう。

朝練サボっちゃダメだろ常考.....、 もうすぐ大会なのにさあ。

しかし、いいよな。

朝っぱらからキスかよ.....。

あれ、まさか村田さん見てないよなあ。

思い出した。武田だ、男の方は。

昨日の夕練の時に「初体験済ませてどうこう」って

そんな話、してたなあ.....。

な無防備で。 ぼんやり、 由佳の顔を見る。 ......俺だってさ。男なんだぞ、 そん

昨夜、 想像の中で激しく犯していた情景を思い出す。

も。 射精の瞬間に、苦い記憶がフラッシュバックしてきた事

ああ、 思わず独り言が出てしまう。 由佳が顔を上げる。

大丈夫?」

「う、うん」

「具合悪そうだよ?私、もう帰ろうか.....?」

「大丈夫だよ.....」

でも」

大丈夫、ちょっと部活で気合入れすぎちゃって」

そ、そう.....」

由佳が何となく、居心地が悪そうにしている。

ってしまった。 静かに毎日、 観察を続けているので、 その程度は分かるようにな

「あのさ」

「なに?」

近藤は熱に浮かされているみたいに、 言ってしまう。

「隣り、ちょっとだけ、座ってもいい.....?」

てこない唇の形。 急に言われた由佳が、 わずかに肩を震わせた。 あ....、 言葉が出

「こ、近藤くんなら、い、いいよ」

「何が?」

げる。 意地悪してやりたくなった。 何がいいの?そう言いたげに顎を上

元に視線を置く。 その眼はギラついている。自分でも分かる。 制服のブラウスの胸

「と、隣り。座るの」

声が震えている。更に追い詰める。

「それだけ?」

由佳が、泣きそうな顔をしている。 まさか、 近藤自身だってこん

な言葉は予測してない。

んだ。 悲しそうな眼しやがって。 バカヤロー。 嫌なら嫌って言えばいい

近藤は、それでも続けてしまう。

それだけ?」

近藤が素に戻る。 由佳が俯いた。 畜生。 小さく見える。こっち向け。 ちゃんと俺を見ろ。

どうしてこんなに真面目に生まれついてしまったのか。 神を呪う。

50 こっち向け。 ものすごく大事だから。それだけ言いたいだけだか

ゎ 私も、 近藤くんには言いたいことがある」

に聞こえる。 俯いたまま、 由佳が言う。 その言葉の響きが、 何となく悲しそう

なに

俯いたまま言う。私が可哀想だから、こんな事してる」

違うよ」 いいからこっち向け。 そんな事なんとも思ってねーよ。

「だって」

近藤は深呼吸をして、 頭を振った。 そして言う。

隣りに座りたい」

「う、うん」

脳裏に、 立ち上がった。 妹の顔が浮かぶ。 由佳の肩が、 びくっ、 大きく震える。

黙って椅子とノートを持って、 由佳は固まったままだ。 なんてこった。 由佳の隣りに置いて座る。 近藤は心の中で呟く。

ちょっと、村田さんの。貸して」あ、筆記用具持ってくるの忘れた。

ンを取る。 固まったままの由佳を構わず、勝手にペンケースの中のシャーペ

大きな字で。 由佳の広げている大学ノー トに書く。 英単語の、 ずっと下の方に。

. ごめん だいすき,

書き終わった時、 かすかに上目遣い。 由佳の頬が赤くなっている。

今度は言葉で言った。

ごめん」

「ううん」

由佳の膝の上に、 なんとなく震えて見える握り拳があった。 その

上に、自分の掌を置く。

握る。 包むように、 指を曲げる。 由佳が、 その拳を広げて裏返す。 掌を

あったかい」

ぽつん、と由佳が言った。

「そうかな」

「うん」

「ずっと、こうやってみたかった」

「私と?」

「そう」

「う、嬉しい」

「良かった」

言いながら、近藤は思う。この人は無理に奪っちゃだめみたいだ。

それに....。

「あのさ、夏休みも毎日、こうやって会ってくれない?」

「うん」

部活の大会とか以外の日。毎日会いたい。村田さんと」

「私も会いたい」

じゃあ決まりだ」

うん」

## 夏休み初日。

宅する。 部活は真面目に出る。 近藤は汗びっしょりになった顔を洗い、 帰

1時半に、 由佳が来てくれる事になっていた。

電車通学だから大変だろう、近藤が言うと「大丈夫、二駅だけだ

から」と返事をされた。

っ た。 申し訳ない気持ちもあった。反面、 家から出してやりたいとも思

つ それよりも何よりも、 近藤自身が由佳を、そばに置いておきたか

そそくさと着替え、食事を済ませ、 ふらりと外に出る。

迎えに行ってやるか」

てくてく歩いて行く。 本屋で見たい本もあっ た。 10分程で、 ついでに。 駅に着く。

ゆるめの白い半袖Tシャツに、デニムのスカート姿の由佳が改札

を抜ける。

ピンク色の大きいハートのプリントが、 片腕に、花柄の大きめのバッグを掛けている。 Tシャツの襟ぐりは大きくて、屈んだら白い胸元が見えそうだ。 アクセントになっていた。

髪を結ぶゴムは外していた。 昨日、 送って行く途中に頼んだのだ。

自分といる時だけでいいから、 ゴム外して、 ځ

それが見たかった。 自分に従ってくれた由佳を、 可愛く思う。

った。 夏休みだから当然なのだが、私服姿は初めて見る。 凝視してしま

腿といい。 生脚か....、 耐えられるか俺。 眩暈がしそう。 膝小僧といい、 太

て、正直そそる。 足首が細いのは知っていたけれども、 膝の上は、 むっちりしてい

「来てくれたの?」

近藤の視線に気が付いた由佳が、 照れ臭そうにしている。

「可愛いのは罪だね」

「えつ」

「いや、何でもない」

並んで歩いてていいんだろうか。そんな事まで考える。 頬を染めた由佳は、 本当に可愛くてたまらなかった。 近藤の方

が赤くなる。

並んでても大丈夫かな……。 服装は、スポーツブランドの黒のTシャツにGパンだった。 まあ

さっき、電車の中で」

由佳が話しかけてきた。

「ん?」

「柳楽くんに逢ったよ」

· 柳楽?」

うん」

由佳の隣りの席の、陸上部の男だった。

「何かあったの?」

「ううん、別に」

近藤の席は一番後ろだから、教室全体が見渡せる。

柳楽が以前から、 由佳に、声を掛けたそうにしていたのは気が付

いていた。

それも、 あの日曜日以来からだった。 だから尚更、由佳が近くに

いないと不安だったのだ。

「陸上大好き」な所は俺と一緒だ。でも、 柳楽は..... 何となく違

う匂いがする。

あいつは.....。 何 の為に走ってるのか分からない。

いつでも自分と、 誰かの優劣を付けたがっているみたいだ。 楽し

いか、それって。

柳楽く んって、 トライアスロンしてるんだったっけ?」

ああ、 トライアスロンな。 あれは凄いよ、 俺には無理だもん」

「そうかな」

由佳が立ち止まった。

真剣な眼をして、 しかも唇をきゅっと閉じて、 こっちを見ている。

まるで"やれば出来る"とでも言いたげだ。

うん。3000メートルが限界」

何気に話の方向を変える。

- 短距離と、 中長距離の人のトレーニングメニューって」
- 一違うよ」
- そうなんだね、そういうの全然、 知らなくて..

近藤は何気なく口にする。

村田さん、口数、多くなったね」

「えつ」

が笑って言った。 そ、そうかな。 うん、 そう思う。近藤が真面目に返したら、

「早く、水族館行きたい。 水族館でなくてもいいの」

「そうだね」

「近藤くんと一緒だったら、どこでもいい」

下が激しく勃起して来た。 いや……。 近藤が赤くなった。それって反則.....、言いかけて止めた。 もしかしたら。 ジーンズの下のトランクスの、 そのまた いせ

その日の部活は休む。 結局、 勃起しながらデートの約束をする。 近藤の誕生日の翌々日。

には家族と帰省するのもいる。 それでなくても、8月は合宿もある。 お盆もある事で、 部員の中

たまにはいいだろう。 夏休み40日間の10日程を除いて、ほとんど拘束されるのだ。 案の定、 由佳が尋ねる。

- 「部活、休んで大丈夫?」
- 「一日くらいなら、大丈夫」

「そう.....」

8月に入ったら、 すぐに合宿があるんだ。 3泊4日、 泊りがけで。

そこでトレーニング漬け。

そこで一所懸命、頑張るから大丈夫.

「合宿?どこか行くの?」

千 葉。 部長が言ってた。 競馬学校の近くらしい」

「競馬学校?」

うん、 その辺。 強制参加。その前に、 ちゃ んとデー たいんだ」

うん」

ちょっぴり由佳が不安そうな顔をした。

「間近になったら、ちゃんと言うよ」

由佳が頷いた。近藤もほっとする。

なんとなく"日常"になってしまった、 この"二人で自習" の 習

慣が、ぽっかり無くなってしまったら。

そう考えてしまうのは、 近藤でも理解できたから、なるべく安心

させたい。自分でも安心したいのだ。

二人は黙々と、 いつものテーブルに向かい合わせになって、 夏休みの課題を片付ける。 今はこれでいい たまに雑談をしながら のかな

:

近藤は、 問題集を真剣な顔で見つめている由佳を見て思う。

•

が開く。 近藤と改札口の手前で別れて、 足を踏み出して車内に入る。 ホ ー ムに向かう。 電車が来る。 扉

分の顔を、 電車の進路が日陰に差し掛かった所で、 ちらりと見る。 由佳は窓ガラスに映る自

頬が上気してるのが、 誰にも分からなかったらいい のにな。

さっき、 改札を抜ける直前に、 近藤が耳元で言った言葉。

「村田さん、大好き」

んだろう。 たった一言なのに、どうしてこんなに気持ちが落ち着かなくなる

何の返事も出来なかった。 申し訳なかったな.....。

誰もいない家の中で、 あれがあったから、ついつい何かと躊躇してしまうのは事実。 それにしても.....。 以前に絡んで来た時の近藤は怖かった。 どこに逃げたらいいだろうとも考えた。

近藤くんも、男なんだ.....。

小学生の時、 酔った父親から、Tシャツを破かれそうになった事

を思い出す。

性が苦手になった。 何とか逃げて、 事なきを得たけれども.....。 あの時から心底、 異

11 つかわたしも.....? 冷房の効いた電車の中、 体が凝固する。

ぼうっとしていた時、 誰かが自分を呼んでいるのに気が付く。

「村田さん.....!

がら挨拶をする。 顔を上げると、 横山だった。 別人みたいに見える... 動揺しな

横山さん、こんにちは」

固いよ。 村田さんって。 フツーでいいのに。 私服の時でも" 委員

横山は、屈託なく笑った。長!!"って感じー」

が、 学校では目立たないようにしている、 眼を丸くしている。 横山の姿しか知らない由佳

深く、第一ボタンは、多分、 瞳は大きくて、少しだけ吊っ 真っ白いブラウスは、フリルが大きいものの、 ている。 乳首と乳首の間の位置すれすれである。 そのV字の襟元

も高校一年生とは思わない。 すっと伸びた鼻筋や、ぽっ てりした唇。 化粧もしているから、 誰

(横山さん、おっぱい見えてるよ上から.....)

方が横山より5センチほど身長が高い。 背の高い男なら、覗いて見ていてもおかしくない。 現に、 由佳の

同性でもドキドキするのだ。 やはり、 同じ高校生とは思えない。

「み、見えちゃうよ。横山さん」

「何が?」

悪戯っぽい言葉の響きに、 面食らう。 目線を落とすと、ピンク色

のタイトスカート。

「う、うーん」

由佳は同級生の意外な一面に、絶句していた。

「びっくりした?」

`うん、すっごく。今、びっくりしてる」

横山が「うふっ」 と肩をすくめた。 つられて笑ってしまう。

「村田さん、近藤くんとこに行ってきたの?」

「うん」

いいなあ。私も彼氏が欲しいな」

「か、彼氏だなんて。そんな」

てるけど、 んだけどね」 た の。 でも有名だよ?近藤くんね、 その頃から知ってるの。 最近すごく変わったもの。 同じ中学だったでしょ。 でも向こうは覚えてないみたいな 私 中1の時、 同じクラスだ 前から知っ

している。 由佳は赤くなった。 いやだ、どうしよう。どうかしたの? 気が付いたら、 自分の家の最寄駅を乗り過ご

「乗り過ごしちゃった、駅」

「え、ほんとう?」

がないから。 横山が慌てた。一緒に次の駅で降りようよ、 私の待ち合わせは急

横山の真剣な眼差しに根負けする。 引き止めちゃってごめんね。 そん な風に言う。 一旦は断ったが、

電車の扉が開く。

夕方の風が吹く、ホームに降りた。

ごめんね、近藤くんの話、してたから」

また茶目っ気たっぷりで、由佳に言う横山に、 ついつい「 しょう

がないなー」と言ってしまう。

そんな由佳を見て、横山がポロッと本音を出した。

「案外、話やすいんだね。村田さんって」

「横山さんだって、そうじゃない」

「ああ、私?」

ムで、けらけら笑い出す。二人で反対側のホー ムまで歩く。

制服を着て、 一歩外に出たら変わるようにしてる」

あったろう。 横山の父は代議士だった。 その一人娘だという事で色々と心労も

そうなんだね。 そんな格好して、 デー トかと思った」

こういう服装してたら、 逆に男が寄って来ないよ?今日の姿は、

内緒ね」

うん、と頷いた由佳に、横山が続けて言う。

いいのに 「村田さんの方こそ、折角の夏休みなんだもの。 デー トとかすれば

「こ、今度行くの。実は」

「えー、いいないいな」

の言葉には悪意が無く、素直な人柄が伝わって来た。 女子高生の会話なんて、所詮はこんなものだろう。 それでも横山

「どこに行くの?良かったら教えて」

「す、水族館.....」

もじもじしながら言う由佳に、 横山は「 いいなあー」 と呟いてい

ったのが横山だった。 ラスと合同で体育の授業を行うのだが、その時に、一緒のバレーボ から話しかけて来た。 ルのチームになったのだ。それで少しずつ挨拶を交わすようにな 由佳の学校では、 女子は女子同士、男子は男子同士と、隣りの 体育の時間が終わって、 今度、 数学教えて。 教室に帰る時に横山 ク

63

んな風に声掛けたりしないの。 私 ホントは私服で出掛けてる時に、 知ってる人に逢っても、

村田さんだから、声掛けたくなっちゃった」

「あ、ありがとう……」

モデルみたいに可愛らしい子に、そんな風に言われてしまった。

同じ歳のはずなのに緊張するのを感じてくる。

向かい側のホー しばらく雑談してから横山は、「またね」と手を振って、 ムに行ってしまった。 由佳と

じる。 自分の家に向かって歩く道は、 何となく荷物も足取りも重たく感

でも、 今日は早く布団の中に入りたかった。

思っていた。 早く寝たら、 近藤に逢えなくて寂しい気持ちも紛れて済む。

いざ布団に入ってみると、なかなか眠れない。

た。 出す。あの朝、横山に数学を教えてあげた後、いつものように教室 ろに座っている女子が、 の引き戸を開けた時に、隣りのクラスの陸上部員と、自分の席の後 終業式の前々日だったろうか。 抱き合いながら何回もキスを繰り返してい 自分の見た衝撃的なシーンを思い

飛び出そうになっていた。 びっくりしたまま引き戸を閉め、 一回引き返した。 心臓が胸から

何の行為があるかも知っている。 映画やドラマで、そういうシーンは観た事があったし、 その先に

なのかと思った。 でも実際に見たのは初めてだった。 あんなに大きい音がするもの

にまで、手を這わせていた。 おまけに男子の方は、プリー ツスカー トをまくり上げて太腿や尻

じゃない....。 学校の中、しかも教室で。 朝からそんな事まで、 しなくてもい

そこまで悶々と考えて、ハッとする。

近藤くん、 観たんだ。 あれ」

かった。 それで合点がいった。 再び、 胸がドキドキしてくる。 あのギラついた視線の理由が、 由佳にも分

近藤くんも、 あんな事したいのかな..... もし、 そうなったら..

また悶々としてきて、 眠れなくなった。

二人とも、 それぞれに思う所ありつつ、 過ごしている夏休みにな

とりあえず明日は近藤の誕生日.....。 そんな日の出来事。

近藤が部活から家に帰る途中、 雨が激しく降ってきた。

みそうにない。 通り雨だったらいいのに.....、と思っていたけれども、

部屋に入って着替えを慌てて済ませ、 外に出る。

右手で黒い傘を差し、左手には母の花柄の傘を持ち、 急いで駅の

方向に向かった。

(今日の天気予報で、 雨が降るなんて言ってないぞ.....

気温が朝から高かったのは分かっていた。

最後の柔軟体操が終わる頃に空が急に暗くなり、 急に土砂降りの

雨が降って来たのだ。

時間的には、 由佳がこっちの駅に着く頃だ。 もし遅れるなら遅れ

てもいい。

二人とも、携帯電話を持っていない。

(逢いたいけどさ.....)

近藤はそれほど必要と思っていなかったし、 由佳は親にねだるの

が嫌だったから。

ていた。 こういう時に、 困るんだな.....。 そう呟きながら、 由佳の姿を探

になっていたら可哀想だ。 どこかで雨宿りでもしているならいいが、 万が一でも、 ずぶ濡れ

トランス手前で 5分も歩かないうちに、 最近建ったばかりのマンションの、 エン

ている由佳を見つけた。 郵便受けの陰にぽつんと立ったまま困った顔をして、 空を見上げ

村田さん...!」

近寄ると、かなり濡れている。

白いTシャツは、 ベッタリ胸に張り付いて、 淡いピンク色のブラ

ジャーが見事に透けていた。

髪の毛も、びしょびしょになっている。 このままだと完全に風邪

を引かせてしまう。

なんか可愛いブラジャーしてんじゃん.....。

近藤の視線を感じた由佳が、 あっ..... と慌てながらハンドタオ

ルで胸元を隠した。

大丈夫?」

「う、うん.....」

·どこらへんで降って来たの?」

駅を出て、ちょっとしてから.....」

由佳の足元を見た。スニーカーも、 ぐしょぐしょに濡れている。

「ごめんね、来るのが遅くなって」

ううん」

くじゃん」 申し訳ないけど、 家まで歩ける?服とかさ、 乾かさないと風邪引

そこで着替えて、それから.....。 そこまで言って、 近藤は言葉に詰まった。 今、 家には誰もいない。

由佳が無理に笑顔を作って、近藤を見上げる。ありがと、近藤くん。でも、大丈夫だから」

その傘だけ、貸して。 コンビニも遠いから、 傘が無くて困ってた

くれたらいいのに。 土砂降りの雨の音が耳に響く。 こんなに近くにいるのに。 甘えて

「風邪引くよ」

「大丈夫」

近藤は、由佳の眼を見る。 困っ たような、 泣きそうな眼をしやが

って。.....強い口調で従わせる。

癖になっていた。 大概こうすれば、弟も妹二人も従うので、 近藤の、 なんとなくの

帰ればいい」 「だめ。 ちゃ んと、 服も髪の毛も乾かさないと。 雨が弱くなったら

「でも」

「とりあえず歩こう」

おずおずと受け取る。 有無を言わさず、左手に持っていた傘を手渡した。 由佳がそれを、

バスタオルを持って来て渡す。 並んで歩き、家に入れる。とりあえず玄関に待っていてもらい、

ら言うの止めとくか。 迷子になって、 おまけに雨に降られた犬みたいだな。 怒られるか

「それで足を拭けばいいよ」

「ありがとう」

由佳が、ようやくほっと溜息をつく。

小さな吐息は作為的でないせいか、 下半身を刺激する。 気が付か

れないように、後ろを向いた。

- 靴下、脱いでもいいかな....

うん

も丁寧にタオルで拭いて つま先まで、 べったり濡れてしまっている由佳は、 緊張しながら

近藤の後ろを付いてリビングに入った。

ヤ さっきみたいに言ってしまう。 ツと、 ぶつくさ言いながら2階に上がり、自分の部屋から真っ赤なTシ 段取り悪いな俺。さっきまとめて渡しとくんだった。 ちょっと待ってて」 リビングにいる由佳に渡しながら、 お気に入りのブランドの黒いジャージのズボンを探した。 弟や妹に言うのと同じ口調で、

言った瞬間、 あっ、と思った。

シャワー浴びてきな」

に赤くなる。 案の定、 由佳の顔がみるみるうち

ぁ あのね、 \ 変な意味じゃなくって」

うん」

うん?え?

わかってる」

由佳が、 真っ赤になりながら、 クスクス笑っている。

たいに聞こえた」 なんか今の言い方、 " おにいちゃ hį めっちゃ怒ってます! み

「だってさ.....」

近藤くん、 いつもごめんね」

なにが?」

何でも。 心配掛けちゃうから」

いよ全然」

こっちから目線を外さないで頷く由佳を見ていたら、

本当に襲いかかりたくなってくる。

あ、あのさ、村田さん」

なに」

ちゃんと言う事聞いて」 シャワー、 浴びないと、 体が冷えちゃうよ。 変な事しないから、

事で、 ホントはしたくてしたくて、堪らないんだけど。 自分にも相手にも保険を掛ける。 とりあえず言う

うん・・・・・」

あ、俺、赤いTシャツ持ってきたか。 ちょうどいいや。ブラジャ

- も濡れてるから外しなよ」

にやにやしてみた。

「バカ」

「乳首は透けにくいよ赤だから。厚手だし。立っても大丈夫。 うひ

歯を出して、にやにやと笑ってみる。

ひ、ひどい

だって風邪引いたらデートできないじゃん。 楽しみにしてるのに」

え、 早く行け、 折畳みテーブルを広げにかかる。 行かないと襲うぞ"と、 念を飛ばしながら姿勢を変

ありがとう。 ちょっとだけ使わせてください」

うん

パンティー は濡れてるまんまか.....、 ぶつくさ言いながら近藤は由佳の背中に呼びかける。 まあしょうがないか。 白々

ェストって言うの?そこにある」 村田さん、バスタオル新しいの使っていいから。 風呂場の横のチ

ありがとう」

濡れてる服は、 後で洗面所の乾燥機に突っ込んだらいいな。 うん。

と、わざとらしく言う時もある。 奈津子は自分が用を足しに行くと「おにいちゃんのエッチー よくある間取りだとは思うが、脱衣場の向かい側がトイレ。 近藤の家の風呂場の扉は、全面、磨り硝子になってい ්තූ

のは父だった。 実際、結構透けて見えるのだ。そう言えば。この家を、設計した さすがに下の妹の亜紀子は「やーだー」程度だけれども。

が、子供が増えてきたらそれはそれで困る。 父にしてみれば、母の裸を見る機会に恵まれてい いかもしれない

(村田さんの裸が見えたら、鼻血が出ちゃうな。

一瞬、ニヤニヤしてしまったけれども、ここはぐっと我慢しよう 思い直す。

(トイレに行かなきゃいいんだよな、うん)

今日は特に、 テーブルの上で、赤本を広げてみたりしている。 全然、 頭に入って来ない。

やはりTシャツもジャージも、 由佳が頭にバスタオルを巻きつけて、 サイズが大きかったようだ。 リビングにやってきた。

やたらセクシーに見えるのだろう。 何でこう、 同じ歳くらいの女子がサイズの大きい男物を着ると、

ジャージのズボンから見える、 くるぶしや、 かかとが生々しい。

近藤く よかった」 λį ありがとう。 体 あったまったよ」

うちに、 近藤は、 また勃起してくる。 子供みたいに頬を上気させて、 礼を言う由佳を見ている

の女の子がしていると、やっぱり印象が全然違う。 同じような"頭にバスタオル"は妹や母で見た事はあるが、 年頃

色白で頬が丸くて、眼が大きい由佳が、それをしている。

顔では、にこにこした表情を作りながら、 由佳から隠れて見えな

い股間に掌を当てて押さえる。

るくらいヤバイ。 本当にヤバイ。 テーブルをひっくり返して、 飛びかかりそうにな

書を取り出して、 そんな近藤を知る由もなく、由佳は自分の鞄から筆記用具や教科 いつものように勉強をし始める。

ていた。 近藤も知らん顔をして、 自習を始めていた。 いつの間にか集中し

少し経ってから、あ、と思って呼んでみる。

村田さん。 水族館に行く日、 待ち合わせどうしよう?」

がない。 顔を下に向け、 英単語から眼を離さないままで問いかけた。 返事

「待ち合わせどうする?」

もう一度、言ってみた。やはり静かなままだ。

「 ん?」

ている。 近藤が顔を上げた。 思わず噴いてしまった。 寝てる。 シャ ペンを持ったまま、 由佳が寝

それでも起きない。

無防備な人だなあ...」

呟いて、音を立てないように自分の部屋に上がる。 ベッドの上か

ら毛布を引っ張り出した。

そっと肩に掛けて、前に回り、 リビングに戻った時は、今度は突っ伏した姿勢で寝ていた。 シャーペンを指から外してやる。

その時、少しだけ肩が動いた。

を拾う。 毛布が、 肩からずれて床に落ちた。 あっ、 と思った近藤が、 毛布

かがんで、 目線を下から上に移して行った時、 ドキッとした。

を見たから。 突っ伏して寝ている由佳の、 Tシャツの袖がめくれた腕の付け根

大きな青紫色の痣。

もう片方の腕の付け根にも、 あるのだろうか。 確かめる勇気は無

かった。

て、しかも大きい。 初めて見た時、前髪に隠れたところにあったそれよりも、 色濃 <

涙が浮かんでくる。まばたきをしたら、それは頬を伝って行った。

静かに、 毛布を由佳の肩から、大きく覆うように掛けた。

何故、今迄、気が付かなかったんだろう。

さっきのマンションの郵便受けの所では、 正面を向いていたし、

そこまで目配り出来てなかった。

親にそんな酷い事をされていても、 淡々と自分に逢いに来てくれ

て。

泣いてもい い のに。 それくらい、 全然構わないのに。

が止まらない。 洗面所に顔を洗う為に動く。 声を殺して近藤は思う。 顔をざぶざぶ洗っても洗っても、 淚

: 村田さん

......あなたが嫌がる事は、したくない。

つ ていた。 熟睡している由佳を見ていたら、 勉強する気はとうに失せてしま

余りにも無防備すぎる人の寝顔を、 まじまじと見る。

ふっと思う。多分、自分の願いは少しだけ叶ってる。

だ。 誰にも邪魔されないように、この人の時間を作ってあげているん

そばに寄った。 近藤は、 少しだけ唇の端を緩めながら、 リビングにあるテレビの

時 々、 イヤホンを耳に就けて、 由佳の方を見る。 適当に父が持っているDVDを観ながら、

だけだ。 こちら側から見えるのは、 寝てる。 こんちくしょう。 バスタオルを高く盛った頭と毛布の塊

ノーガードにも程がある。

生は不公平なのだろう。 かだか15、6年くらいしか生きてないのに、 映画を観ながら色んな事を、 ぼんやり考えている。 どうしてこんなに人 同じ様に、

待て、 そしたら絶対に、 俺んちの妹に生まれてきてたら良かったんだ。 近親相姦?それはなあ。 あんなに寂しい笑顔なんかさせていないのに。 一歳違い位で。

でも確信する。 もしも村田さんが妹だったら、 理性は吹き飛んで

いやすいのに。 どうして俺の部屋が2階にあるんだ。 1階だったら警戒心なく誘

ものすごく我慢してるのに。 ぽかんと開けた小さな唇に、 触れたくてたまらないのに。 毎日、

...でも今の村田さんが、許してくれるだろうか?

唇に触れるだけでいいのに。 あのダメダメ目線が近藤を怖気づか

せる。 近藤の目線はさっきから、微動だにしない毛布の塊にある。 何だかんだ言って嫌われたくない。

急に、 殴って泣かした時の妹の顔が思い浮かぶ。

そう言えば、村田さんの前で泣いてしまった日よりも前に、 妹や弟はいいよな...。 父さんや母さんから叱られて泣けるからな。 泣け

たのはいつだっただろう?

見栄や体裁から一番離れた所を、由佳はいつも突いてくる。 心の

一番、柔らかい所を不意打ちしてくる。

だからか。いつもあの人の前でだけ、 泣きたくなる。 村田さんは

多分、そんな自分を蔑んだりしない。

ヤバイ俺ほんとに泣きそう。

'...近藤くん?」

ていた。 振り向いた。 毛布の存在にも気付いた様だ。 由佳が照れ臭そうに、 低い姿勢で額をぽりぽり掻い

寝ちゃったんだね、私」

うん」

背中だけ斜めに曲げて、 ニヤニヤしながら返事をした。

「恥ずかしいー」

ぱた足踏みをしてる。思わず噴き出してしまう。 ホントに恥ずかしそうな声で、顔をテーブルにくっつけて、 ぱた

う言いながら、 「よく寝てた。 カーペットに座ったままの姿勢で言った言葉に、 また足踏みする。 起こすのも悪くてさ」 いやー ん」そ

意外な姿だ」

「な、なにが」

多分、俺だけなんでしょ。 そんな事が出来る人の前って」

「うるさい」

眼だけで睨んで来た。

だいぶ言うようになったじゃ いいぞ、 もっとだ。 そんな感情

が、緩やかに近藤を満たす。

「ノド乾かない?」

「乾いちゃったかも」

「じゃあ待ってて」

立ち上がって台所に行き、 麦茶のペットボトルとマグカップを二

つ、テーブルの上に置いた。

由佳が近藤を見上げる。 その視線に鼓動が急に高鳴った。 由佳に

は聴こえていない。

グが見つからない。 それでも緊張する自分を知覚する。 お互いに視線を外すタイミン

由佳の眼に映る近藤は、 どこまでも優しく温かい「違う世界の人」

だった。

れない。 .....あんな優しい眼をしてるけど、 一瞬、思う。 私を脅かしに来てるのかもし

た。 そして、 開き直り切れず、 わずかな緊張に耐えられなくなったのは、 目をそらす。 由佳の方だっ

「近藤くん」

「はい」

「飲みたい」

「はい」

近藤が二つのマグカップに麦茶を注いだ。

「ありがと」

「いいえ」

「さっき、泣きそうな顔してた」

「え?ああ、映画でね」

`...ポリスアカデミーだよ」

え?」

親父は回顧厨か。 ちょうどエンディングになっていた。だいぶ昔の映画みたいだな。 もっとマシな映画集めろよ。

「村田さんも知ってるんだ、これ」

面白いよ、ってレンタルビデオの人に勧められたの。 ホントに面

白かったから」

「へえ。 僕たちって案外、 昔から繋がっていたのかも」

「バカ」

こいつ本気で寛いでやがる。 近藤は、 自然と頬が緩む。

うんそう。そんなバカな俺から御願いが」

手、つないでもいいかな」

由佳の眼が微かに大きく見開いた。 もう一度尋ねる。

いいかな」

頷 い た。

んな少しの時間が、

物凄く長く感じる。

テレビのスイッチを切って、由佳の隣りに椅子を置いて座る。 そ

で掛けた。 ことん、 と椅子の脚が床に着く音だけが響く。 自分も毛布を肩ま

「村田さん」

れている。戸惑っているのかもしれない。 言いながら、由佳の手を黙って握り締めた。 由佳が黙って受け入

くれていた。 その手を強く握り締める。 満足しすぎて眠くなる。 しばらくしてから、 由佳が握り返して

いやいや、 もうちょっと...。

あのさ...」

なに」

ほっぺたと、 唇 触ってもいい?」

俯いたままの由佳の肩が、 ピクッと動いた。

うん…」

「... こっち向いて」

片方の手を繋いだまま、もう片方の掌を、そっと頬に当てる。 由佳がバスタオル頭を動かして、近藤の方を向く。

「俺も」「私、今、すごく。は、恥ずかしい」 「すべすべしてるね」 「こ、近藤くん」 なに」 ほんのり赤くなった頬で、まっすぐ近藤を見ている。

79

近藤の呼吸が荒くなる。

こうとした、その時。 頬を覆っていた掌を外し、 人差し指と中指を由佳の唇に持って行

と体を震わす。 玄関の扉が、 ガン、と大きく開く音がした。二人とも、 ビクッ!

「ただいまー!」「おにいちゃん、 いないのー」

由佳は寝た振りをする。 近藤は、弾かれたように毛布から出て、 廊下に出て行く。 同時に

ましく水泳クラブの報告を始めた。 **奈津子と、弟の芳樹が「おかえり」と言う近藤の姿を見て、** やか

「シーツ」

近藤は自分の事も落ち着かせるように、 人差し指を立て、 自分の

唇の前に持って行く。

「リビングで、おねえちゃんが寝てるから、 静かに」

さすがにまだ小学生児童は可愛らしく、 年長者の言う事には素直

に従う。善い事だ。

芳樹が目をくりくりさせて、 小声で近藤に尋ねた。

おねえちゃん?誰?」

あのね、おにいちゃんの彼女」 奈津子が、 芳樹に耳打ちした。

奈津子?帰り時間、早くないか」

あともうちょっとだったのに。

普通だよ?もう5時半だもん」

えっ、 もうそんな時間?早いなあー。 白々しい演技で、 頭をかき

むしってみたりする。

雨止んでた?うん、もう止んでるよ。

佳は、笑いを堪えている。 なんとなく聴こえてくる兄弟のやり取りを、 背中で聞いていた由

「村田さん、起きて。服、乾燥機に入れよう」

「そうだった。忘れてた、私」

呼びかけて合図してくれる近藤に、 由佳が噴き出しそうな顔で、

毛布を外してみた。

芳樹が、近藤そっくりの顔を紅潮させながら挨拶してくれる。

· おねえちゃん、こんにちは」

**こんにちは**」

洗面所に行くと、 由佳に言う。 近藤が乾燥機の前で、 ブラジャ の裏側をしげ

「村田さんの胸って、大きいの?」しげと眺めていた。由佳に言う。

゚し、知らない.....っ!」

真っ赤になって、近藤から取り上げた。

ごめんごめん。すぐ乾くよ」

由佳が脱いで畳んでいた服一式と、ブラジャー を乾燥機に放り込

みながら、そう言った。

「ありがとう」

「乾いたら、着替えればいい。 そしたら駅まで送って行く」

「あのう」

「なに?」

「わがまま言ってもいいかな.....

言い辛そうにしている。 なに?もう一度尋ねた。

家の近くまで... 近藤くんと居られたら嬉しいなって」

いいよ

よかった」

ほっとしたような顔で、 由佳が近藤を見上げた。

「何で早く言わないの」

今迄、家まで送るのは考えてなかった。 由佳の家は、駅から歩いて5分程の所にあると聞いていたから、

「だって」

「だって、なにさ」

答えた。 照れ臭そうに頬を赤く染めて、下を向いた由佳が無愛想な口調で

そういうのは、 私も、近藤くんに甘えたい。妹さん達みたいに」 もっと早く言ってくれてもいいのに」

うんし

甘えられないこの人が、自分に心を許してくれる。 由佳も嬉しいかもしれないが、近藤も別の意味で嬉しい。 他人に

由佳の家の近くまで行ってみる。

改札を出て、本当に少し歩いただけで、 案外に築年数が経ってい

そうなマンションがあった。

それを由佳が指差して「あそこ」と言う。

. ほんとに近いね」

近藤は、顎をしゃくり上げながら笑った。

「あんまり近いから言い出せなくって.....」

「いいよ」

゙ありがと」

いいえ」

5センチ程、 視線を上げて、 じっと近藤の眼を見ている。 吸い

込まれそうになる。

このまま路上で押し倒せたら、どんなにいいだろう。 だけど、 反

阗

を。 無垢なまま取って置きたい気持ちも、 でも他の男には渡したくない。 大事に、 初めて湧き上がる。 大事に。 この人の事

「あのさ」

「なに」

水族館に行く日、 ここの駅で待ち合わせしよう。 朝10時 ۱ ا ۱ ا

由佳がまるで、花が咲いたように笑って頷く。

明日、走るの見に行きたいな.....」

「来てくれるの?」

「だめかな」

心なしか、 由佳の眉毛が8時20分の形になった。

「そんな事ないよ、頑張るし」

自分の競技を見に来てくれる人が、 母親以外にもいるなんて。 照

れ臭いけど嬉しいものだと思う。

「どこらへん?」

競技場を教えた。 自分が出る種目の、 大体のタイムスケジュ ル

「行くね」

も。

· うん、ありがとう」

そ、 由佳がぱちぱち、 その後、また自習しに来てもいいかな まばたきをする。

「もちろん」

よかった.....」

頬が赤くなった事、 多分、 由佳は気が付いていない。

可愛いな....。

「む、村田さん」

はい?

.....いや、ごめん。何でもない」

由佳が、言いよどんだ近藤の手を取って握りしめた。

「あのね、 ゎੑ わ私、 今日初めて分かった。 誰かがいてくれるのっ

て、すごく.....

近藤が、 何も言わずに頷いた。 由佳の眼が、 少し悲しそうに揺ら

<

「また明日ね.....」

由佳は背中を向ける。

歩き出す人を近藤は見送る。 胸が痛い。

多分、 今の俺は泣きそうな顔してるんだろう。 それは確信する。

既に暗かった。

駅を出てから、

本屋で立ち読みをする。

ふっと外を見ると、

もう

帰ろうかな...。

たくなった。 自宅へと歩く途中、 境内の脇の電柱が白く明るい。 結構大きい神社がある。 なんとなく御参りし

足を進めると、 口笛を吹きながら境内へと続く、 舗装された道の脇に、 緩い坂を登り始める。 夏になると野良猫が集まるべ もう少し

ンチがある。

て かすかに、 そのまま進もうとする。 やたら甘い声が聞こえてくる。 猫の交尾だろうと思っ

藤に教える。猫じゃない。 ベンチまで、 まだかなりの距離があったはず。 女だ。 それでも本能が近

立ち止まったまま眼を凝らすと、見覚えのある顔が見える。 そう確信した瞬間に、 近藤の鼓動が激しくなる。 約 2

(えつ…?!)

0メートル程の距離..。

電柱のほのかな灯りに、 浮いて見える武田がいわゆる後背位で、

女の子を責め抜いている。

ている。 それでも、女の子の理性では抑えられない位、快感は強烈らしい。 ベンチの背もたれに両手を掛けて仰け反る彼女は、がくがく震え 声を出さないように片方の手で、女の子の唇を塞いでいる。

あまりにも体が反応するので、 武田の手が追いついて行かない の

だ。

えてきそうだ。 その度に甘い声が漏れる。 よく響く甘い音。 武田の吐息まで聞こ

なかったように坂を下る。 心臓の鼓動が、 違う意味で、 ますます高鳴る。 振り向いて何事も

俺が見たって、アイツ分かってないよな...?

初めて生で見た、他人のその場面。

あ んな風になるんだろうか。 家に着いても、 あの声が耳から離れてくれない。 村田さんも..

佳を裸にする。 そこまで思って、初めて近藤は苛々してくる自分を自覚した。 有無を言わさず犯しまくる。 由

優しくしてやりたいのに.....。

ごめん.....。

い。そうしたい。そうなったらどんなにいいか。 そう言いながら、腰を力任せに突き入れて行く。 満足なんかしな

ている事に、近藤は自分で気が付いている。 射精して初めて我に帰る。射精する事で、 そういう欲求を放出し

全部.....。貴女の全部.....。

俺に下さい....。

近藤は朝5時に眼が覚めた。

ゼッケンを付けた半袖の体操服と、 部員達は個別に現地に向かう。時間に遅れるのはイヤだった。 いつも校外での競技会などの日は、 短パンを身に就けてから、 朝早く眼が覚めてしまう。 近

藤は「あ、しまった」と独り言を言う。

「どうしたの」

朝起きて、朝食を用意してくれた母に答える。

「何でもない」

..... 昨日オナニーしちゃった。走れるかなー。

ま、何とかなるだろう。

それに今日は村田さんが来てくれるんだし、 カッコ悪い所は見せ

られない。

自分が出る種目は800と1500だ。 さっき着た物の上から、

学校の長袖体操服を更に着る。

スポーツ飲料や、 カロリーメイト、 スパイク、 タオルをガサゴソ

とバッグに詰めて、家を出た。

天気がいい。 風もそれほど強くない。 よし。 唇を結んで、 前を見

昨日は軽めに走っていた。

ಠ್ಠ

隣りの市の競技場に、電車を使って向かう。 すり鉢状になってい

る競技場。 ここは何回も来てる。

整える。 簡素な開会式を過ぎたら、 あっと言う間に各競技の準備を係員が

大概の場合、 8 0 ルトラックを2周する。 0メー トル種目の方が、 体力・ プログラムの前 知力の過酷なレース の方。

がもうすぐ始まる。

た。 競技場全体を見渡した。ここは、 中学の時にも使っ た競技場だっ

れた事が無かった。 入学してから今日に至るまでの競技大会で、ここの競技場は使わ

ナーがあった。 自分が走るトラックのスタートライン横には、走り幅跳びのコー 地の利は俺にある。 直観した。 横に視線をそらしてみる。

はスパイクに履き替える。 800メートルに出場するのは、近藤の高校からは今日は3人だ。 1年生は近藤だけ。それぞれ3人とも、 別々の組になった。 近藤

このまま走る。 ピンの長さは4ミリ。それは近藤の場合は変えない。 1 0 0も

風が頬に当たる。 スパイクに履き替えた瞬間、近藤の頭は空っぽになる。 前を向く。

近藤は4組目だった。他の2人は後に続く。

ホイッスルが鳴った。集合だ。

思い思いに体を動かしながら「陸上の格闘技」とも呼ばれる、 8

00メートルトラックに向かう。

自分に当てられたポジションは、 アウトコースの一番端だった。

まあいい、こっちの方が走り易い。

ああやればいい.....。 8人並ぶ。アウトコース。 120を過ぎたら、少しずつ前に出れば。 幾度となく頭の中で描いたイメージ。 唇の端を上げた。

ピストルが鳴った。

細かい吐息がうねりのように固まって動く。 腕を振 スから動けない。 る 脚を上げる。 2周目からは駆け引き。 前にいる選手を風除けにしながら進む。 途中までは決められた ゴミゴミした集団の

までたまるか。 んぐん踏み出す。 誰かのスパイクが脚に当たる。 思いっ切り差してやる。 これもレー 前に。 スの醍醐味。 額に風が広がる。 このま

んだ。 ふたり500の地点で抜いた。 残り300だ。 行け !心の中で叫

近藤つ!!先輩や同級生の歓声が聞こえる。 力を振り絞り、ゴー ル 前 、 もうひとり捕らえたのは覚えていた。

でいる。 トラックの上でひっくり返った。係員が、 近藤の上から覗き込ん

「大丈夫?さっさと動いて」

あ、は、 はい」

きだ。 ぴょこん、と立ってみた。 立てる。走り切ったこの時間が凄く好

ひょい、と横を見ると、 部長が満面の笑みを浮かべて近寄って来

た。

「お疲れさん、この組で2着だ2着」

「マジっすかー

いいよ近藤、 すごく良かった今の」

部長が興奮した口調で言っている。 ふたりで隅に寄った。 他にも

続々と走るメンバーがいるからだ。

「くうっ、俺1着取りたかったのにですねーっ

呼吸を整えながら、 部長に伝えた。

僅差だったと思う、 あれは」

んー、悔しいなあ

気にすんな。 まだ午後もある」

そうですけどね」

またピストルの音が鳴った。 ぐずぐずしていられない。 この次の

組には、 先輩達が出る。 応援席に行かないと。

戻る途中、 ひとりの先輩が声を掛けてくれた。

- やったなあ、 近藤」
- ありがとうございます」

席に着いたまま、 柳楽が珍しく「お疲れ」 と言ってくれた。

- サンキュ」
- 委員長、来てる」
- 「え、どこ?」
- こっからじゃ観えねえよ。 いいよな、 おまえ」

そう言ったきり、どこかに行ってしまった。 柳楽が出る30

は午後のはず。まあいいか。

メートル、 100メートル、 今日、 この競技大会で行われるトラック種目は、 1500メートル、3000メートル。 200メートル、 400メートル。 50メートル、 そして800

書いてあるのは略称だった。 メートルは略して、単純に数字で呼ぶ事が多い。プログラムにも

.....自分の誕生日に、幸先い いな。 軽く周りをジョグしながら、

体が鈍らないようにしていた。

あと5分、走ったら休憩しよう。

りながら、 近藤は、 大きく背伸びをする。 自分で自分を誉めてやる。 あとは午後の1500だ。 走

背中から小さく声がする。

近藤くん!」

振り向くと、 頬を紅潮させた由佳がフェンスに指を掛けて、 自分

を呼んでいたのが分かった。

半袖のダンガリーシャツの上半身が見える。 ジョグを止めて駆け寄った。 由佳の真下の位置で、  $\neg$ ぁ、 手を振った。 村田さん

「見てた?今の?」

「うん、見た見た!!」

げて走り幅跳びの選手達の方向を見ていた。 無いような.....、サングラスを掛けた女の子がいるのに気が付いた。 サングラスの女の子は、近藤の方を見てはいないらしい。 気が付くと由佳の50センチ程の隣り、見覚えのあるような 顎を上

「初めて見た。陸上って凄いね.....」

「凄いでしょ。 でも2着だから失敗だよー

「えーそうなの?」

眼を丸くして、由佳が自分を見つめている。

「まあね」

「そんなこと」

走っていた時の近藤の顔は、 いつも自分に優しくしてくれる近藤

とは、まるで別人のようだった。

ただ前を見て挑んで行く力強い眼。 トラックを走っている時、2周目を過ぎた辺りのあの表情 きゅっと閉じた唇。それに、

ゴール前で他の選手を追い込んで行く時の近藤は、全身をバネのよ うに変え、獲物に襲い掛かる何かの野獣みたいに見えた。

いつもの近藤とは全く違う人が走っている事に、 気が付いた時の

**運撃** 

今、 自分に飄々と笑いかける近藤の表情との落差に、 由佳の心は

震える。

「午後は見てて。挽回するから」

「でも距離長いよ.....」

「大丈夫。良かったら一緒に帰ろう」

「うん、待ってる」

駅のそばにコンビニあるじゃ あそこにいて」

うん」

真夏の太陽を背に、由佳が笑って返事をした。

じゃ、俺、練習に戻るわ」

うん」

思えない服装だった。 由佳の隣り、 横山がサングラスを外した。 今日も高校一年生とは

も後ろスリットも深い。口紅も塗っている。 レンガ色の腰を絞った形のワンピース。 背中が大きく開き、 しか

丸い大きなイヤリングが揺れた。 深い赤い色が、 白い肌に良く似合う。 髪を直した時、 シルバーの

「バレちゃうかと思った」

「ふふっ」

由佳も笑ってしまう。

まみちゃん、今日はどうして来たんだっけ?」

「さあね」

昼休憩を挟んで、 1500メートル走が始まる。

**ත**ූ 列に並んだ猛者達をパッと見渡すと、 2人で並ぶ。近藤は内側から5番目のトラックになった。 去年の総合優勝校の生徒がい 横 一

めいて見える。 あいつに付いて行けばいいのか。 前を見ると、 熱気で地面が揺ら

手達全員に勝ちたい。 負けたくない。 かすかに意識する。 誰に?誰にでも。 意識だけは高く持つ。 自分にも。 スパイクを履いた足首 ここに並んでいる選

ハン、とピストルの音がする。

た。 L A S T 走りながら脇を見る。 と大きく字が書かれているスケッチブッ 指示を出してくれているのは部長だ。 クを持っ てい

ラストー周と300メートル。

もしくは1500に慣れていない者。 この辺りで日頃から練習で誤努力をしている者が振り落とされる。

のゼッケンに迫る。 ているのは優勝校候補の生徒。ペースメーカーにすればいい。 ト一周で、どこまで近づけるか。 最初の300では、最後尾から近藤は走っていた。 なにも考えない。 練習の度に思い浮かべていた彼等 勿論、 見据え ラス

来るランナーたちの、激しい呼吸の音が聴こえる。前にいるランナ の背中の揺らぎが見える。 ただ脚を蹴る力が欲しい。腕を振り切れる力が欲しい。 全力でスパートを賭ける。 後ろから

ゴール前

力を振り絞る。 歓声が聞こえる。 あと50センチの背中。 負けたくない。 渾身の

に寄ってきた。 ルを過ぎてから近藤が現実に戻る。 応援席にいた部員が一気

「近藤おめでとう!」

石井顧問の顔が珍しく緩んでいる。 飛び跳ねた近藤は石井の腹に

パンチを入れに行く。

 $\neg$ 

俺が言うてた通りやんか」 顧問に膝を蹴られた。 痛いけど、 痛くないことにしておこう。

初めて1500で1着になれた。

かっ 中学の頃から、 た競走が150 何回も出場していたが、 0だった。 どうしても1着を取れな

のだ。 んかどうでもいい、 しかも今日は優勝校候補もいる組で、 どっちみち個人が頑張れば学校の順位も上がる 初めて。 学校全体の順位な

悔しくて悔しくてたまらなかった時だって沢山あった。 00も2着だったし。 陸上を始めた中学の頃は、 近藤の呼び名は「2着の帝王」 さっきの8 だった。

く嬉しい。 でもとにかく、そこから脱出することは出来たと思いたい。 物凄

近藤は呟く。 だった。今度の大会でも、 落ち着いてから念の為、 これ位の成績がたたき出せたらいいなと、 部長にタイムを確認する。 3分39秒代

しか変わらない。 自分のペースメーカーにしていた彼とは、 同時に、由佳のことを思い出す。 心の中で近藤は彼に感謝する。 コンマの .05秒ほど

(見ててくれたかな.....)

す。 そう思いながら近藤は、 さっき由佳がいた辺りに向かって歩き出

由佳だ。 水色のシャツを着た女の子が、 自分に向かって手を振っていた。

「村田さん、見ててくれた?」

「うん、見た!」

て近藤と目線を近くする。 陽の光を背にして頬を赤くした由佳が、 フェンス越しに腰を屈め

「応援ありがとうね」

ううん」

・もうちょっと待っててくれる?」

· うん!」

近藤が初めて見た、 屈託のない由佳の笑顔だった。

夏の陽射しの中、 こんなに体も心も昂ぶっているのに、 何故か胸

をぎゅっ.....と。

なにかに強く掴まれたような感情に襲われる。

「俺、戻るね」

「うん」

くるっと振り返る。 部員が固まって他の選手を応援している場所

へと、近藤は歩き出す。

スパイクを履き替えてもいなかった。

自分の競技が終わると、途端に脚が重たく感じる。

あと一時間もすれば、閉会になるだろう。

(村田さん。俺、早く一緒に歩きたい……)

•

待ち合わせたコンビニに、 近藤が到着したのは結局、 午後4時過

ぎ。

店内からサングラスの女の子が、 入れ違いで出て行く。 由佳の姿

を探した。

な眼で眺めている。 奥のレジの斜向かい、 ケーキやドーナツが並んでいる棚を、 真剣

「太るよ?」

そう横から声を掛けたら、噴き出した。

ひどい

「ごめんごめん。帰ろっか

うんし

「もう夕方になっちゃったね」

電車の中で、由佳がぽつんと言った。

半分、 ごめん、こんなに時間が掛かるとは思ってなくて」 予測はしていたが、 もっと早く段取りされているかと思っ

ていた。

「ううん、いいの」

「うん」

「あのね」

っ ん?

「渡したいのが有ったから.....」

左肩に掛けた大きな布製カバンを持った由佳が、 恥ずかしそうに

## 答えた。

「 何 ?」

「うん.....、ちょっと。電車の中じゃ」

「次で降りよう。 少し遅くなるけど、いいかな」

由佳は頷く。確か、次の駅は改札を出て大きな通りに出たら、 フ

ァミレスがあったはず。

電車の扉が開く。 ホームに出た二人は、 お互いの手をつなぎたい

とも言い出せない。

改札を出て、大通りに向かう。

ふたりでファミレスに入った。暦の上は休日であるし、 夏休みで

もあるせいか店内は混雑している。

それでも禁煙席に、すぐに通された。

「お腹すかない?」

近藤が対面にいる由佳に尋ねた。

「そ、その前にね」

?

「あのね」

由佳が、かばんを開き、中から水色のリボンが掛けられた30セ

ンチ四方程度の、淡い黄色の紙包みを取り出す。

「これ、使って下さい。た、誕生日のプレゼントです」

もじもじしながら両手で差し出してくれた。

「嬉しい。ありがとう!」

近藤も、そう言いながら両手で受け取った。 61 いえ、 と小さく由

佳が言いながら、自分の事を見つめている。

「まみちゃんと選んだの。さっき、お昼休みに」

「横山と?」

「そう」

. 一時間位しかなかったよ?」

うんし

......横山と?現地で待ち合わせでもしていたのかな?

「開けてみてもいい?」

「うん」

えへへ、と言いながら丁寧にリボンを外し、 包装紙のセロテープ

を外していく。

「近藤くんって、器用だね」

「うん、俺の唯一の長所」

ふつ、 と由佳が噴き出す。 包装紙を全て開くと、 白い封筒がカサ

....、と音を立ててテーブルの上に滑り落ちた。

「て、手紙は後で」

「わかった」

大きめの透明の封筒に、 くるくる丸められたスポーツタオルが2

枚入っていた。

このブランドのものは好きで、 深い黒色のタオル。 近藤はよく着ている。 真紅のタオ

「わあ....」

思わず溜息が漏れた。

「広げてみてもいいかな」

うん

真紅のパイル地のそれを取り出してみた。 白い Tシャ ツを近藤く

んは、よく着てるから.....、と由佳の声がする。

しっかりした厚みがあり、そして暖かい。

近藤は何故だか自分でも分からないけど、 涙目になって再び由佳

に礼を言った。

「ありがとう村田さん」

「そんな.....、タ、タオル2枚くらいで.....

「でもさ、俺の為にさ.....」

「や、安かったんだよ。そんな」

この人が親から貰う小遣いなんて、 その辺の女子高生と比べたら、

全然デフレ価格に決まってる。

着てる物を見たら、何となく分かる.... それに口で言う程、 タ

オルは低価格の代物でもない。

ちゃんと知ってるんだぞ俺は.....。

大事にする」

うん」

「俺、いま、めちゃくちゃ嬉しいよ」

ゎੑ 私も、 近藤くんのそんな顔が見れたら嬉しい」

なんか頼もっか?」

「ドリンクがいいな」

じゃ、俺が頼んで置くから村田さんにドリンク頼んでもいい?」

何を持って来たらいいの」

首を傾げて近藤の言葉を待っている。

アイスコーヒー。 ガムシロ、ミルク」

うん」

由佳が席を立った。近藤がオーダーする。

入れる。 んだ。そして手紙が入っているらしい封筒をスポーツバッグの中に 由佳の席からは見えないように、レシートを自分の方に寄せて畳

由佳の唇を見る。水を飲む口元。ストローを咥える口元.....。

触りたいな.....。

柔らかいんだろうな.....。

大会の翌日。

今日の練習は軽めにこなす。 明日は休むと顧問には伝えてある。

を見たような気がした。 走っている途中、 近藤は武田の顔を盗み見る。 ちら、

素知らぬ振りをして、 ダッシュの練習を続ける。

校舎の周りを、校庭も含めて5キロ走る。

普通に整地されている訳ではないから、アップダウンもかなりあ

るし戸建住宅もある。

入部当初は部活での、この時間が、 一番キツかった。

って走り抜ける、夏の道は熱い。 この坂を登りきったら自分はもっとタフになれる。 歯を食いしば

自分を追い抜いて行く誰かがいる。

自分に話しかけてきた。 柳楽だった。 追い抜かれるそ

なあ」

あ?」

に話しかけてくる。 振り向きながら走っても一向にペースを落とさずに、 足腰の強さは、 多分、 男子陸上部員の中では一番なのではないか。 柳楽は自分

聞いたか?」

何を」

武田だよ武田。 あいつ神社で女をよ」

へえ」

しらばっくれた。 こういう事には、 首を突っ込まないに限る。

部員全員、 知ってるんだ。 おまえんちの近所だろ。

「 何 が」

ああもういいや。 聖人君子様には、 つまんねえ話題で悪かったよ」

だ。 聖人君子様」?バカヤロウ。何にも知らない癖しやがって。 それにしても、人の口に戸は立てられないとは、 柳楽が、忌々しそうな表情を露骨に見せて、 ダッシュして行った。 よく言ったもの

16歳のオスなんだから、興味がない訳がない。

ただ何となく、 心の底で武田を軽蔑してる自分がいる。

外ってなんだよ外って.....。

着替えている時に、部長に話しかけられた。

「近藤、着替えたら職員室に」

「は?はい」

「俺も行くから」

不思議に思ったが、 個別に部員に対してのアドバイスなら、 うち

の顧問は頻繁にある。

この時期になんだろう.....。もしかして9月の県大会の事?

それなら、自分よりもタイムが早い部員と言えば。 柳楽、 武田。

自分が認めてる同級生は二人いる。

「失礼します」

職員室に入ると、 角刈りで大柄な顧問の石井が「おう」 と近藤を

手招いた。

右手には30センチの物差しを持っている。 男子体育の授業を持っていた。 部活の時間を外れる

ビシビシ鍛えられる。 それに生活指導だっ た。 授業でも部活でも、 陸上部員なら誰でも

ゆる大会で上位に入った先輩が沢山いた。 ただ、それなりに結果は出していて指導を素直に吸収して、 あら

くはない。 石井に指導を受けたくて入学してくる生徒も、 体育関係の大学に入り、体育の教師になった人もいるそうだ。 通年に渡って少な

そうだったはずだ。 部長の鳥飼がそうだったし、近藤自身もそうだった。 柳楽も確か、

きたのだ。 中学の時から、この鬼顧問に指導されたくて勉強して、

い」と言って受験する。 県内の中学陸上部員は、 女子も男子も「神様のいる高校に行きた

ていなかった。 近藤は何よりも陸上が好きだったから、 厳しい指導は何とも思っ

か、分厚い本がカラフルに並んでいる。 石井の机の上には「運動生理学」や「 高校生の指導について」と

「まあ、そこに座れや」

「石井先生なんっすか」

「なんっすか、とは何やねんな」

石井は豪快に笑いながら、 近藤の腰を物差しで小突いた。 痛って

えなあー、パワハラだー。

田教諭が笑っている。 二人の遣り取りを聞きながら、 石井の向かい側に いる、 美術の山

そうこうしているうちに、部長がやって来た。

二人揃ったな。 近藤、 おまえ9月に5000走らへんか」

「県大会?」

5 0 0 0 ... と改めて聞いて、 体が硬くなってきた。 出来るかな、

俺に....。

' 俺よりも速い人がいるでしょう」

「誰や」

奈良でずっと教鞭を取って来たと聞いている。奈良県は男子も女 石井の眼光がやや鋭くなった。 言うてみい。 石井が言った。

子も陸上が強い。 そこで強い選手を育て上げてきた。

それが何故、 関東に移ってきたのか近藤は知らない。

「近藤よう」

はい

誰がおんねん」

そこで3位以内に入ったら、 県大会の5000メー トルに出場できる選手は各校につき3人だ。 11月のブロック大会の出場権が手

に入る。

部長が口を開いた。

柳楽はトライアスロンに出す。

それ以外の種目では、 1年生全体を近藤が引っ張って行って欲し

<u>L</u>

え

近藤は耳を疑った。男子陸上部員で1年生は12人いる。

「な、柳楽とか他にも」

柳楽は別格や。 でも人をまとめて引っ張り上げる力はない」

石井の言葉に、近藤は頷くしかなかった。

おまえと、あと2人、 5000を走れる人間を選ぶから一緒に練

習せえ」

「3000から5000専門ですか」

「ああ」

「えっと……」

どう返事をするべきか。

そこの鳥飼な。 中学時代、 そんなに記録が出る子じゃなかってん

よ?」

え

部長を見ると、苦笑いをしている。

- 授業の成績だって、そんなに良く出来るヤツちゃうかってん」
- 「やめて下さいよ、先生」

部長が焦っている。

- `やめへんわ。おまえが良いサンプルじゃ」
- にやにやしながら部長を制して、近藤の方に向き直った。
- 俺の言う通りにしとったら、 必ず結果は叩き出せる。 5 0 0 0 °

やれや」

「まさか、他にも」

石井は、にやにやしながら言った。

- 当たり前やないか。 種目はな、 沢山あんねんで」
- 「でも武田だって.....」

石井は大きな吐息をついた。

- あいつ、さっき、退部届を持ってきてんやんか」
- 「退部?」
- 「この頃、全然アカンかったからな」

部長が近藤に目配せしてきた。石井はその事については、 話した

くないらしい。

わかりました。5000やります」

帰る時、校門迄、部長と並んで歩いていた。

本当なんだ」 高校入学するまで"たいしたことない選手" だったって言うのは、

部長の言葉に、近藤は頷いた。

「石井先生は本当に凄いと思う。 言う通りにすればいい。 あの先生

は、大人としても尊敬するわ」

「そうなんですか」

今日な、 武田は最初、 俺に退部届を渡して来たんだよ」

「それ違うでしょう」

そう言った、 あいつには。 顔を合わせたくなかったんだろうな、

石井先生と」

「何かあったんですか」

· 妊娠させちゃったんだよ、他校の生徒を」

Ž:...

頭がグラグラしてきた。神社で見た女の子?

親が怒って、こっちに電話掛けて来たんだってさ」

いつの話ですか」

先々週」

うちの学校の生徒じゃないんですか」

」 違う」

ますますグラグラして来る。あの女の子なら、 中絶させて速攻あ

か。

中絶させたんだってさ。 滅茶苦茶、 石井先生が怒鳴られたっぽい」

「武田の親じゃなくて?」

「あいつ、親いないじゃん」

え

いない、って言うかさ。 遺棄されてんだよ。 令 じいちゃんばあ

ちゃんとこに住んでる」

^ へえ.....」

年寄りじゃ話にならない、 って今度は生活指導だよ。 担任だしさ」

「とばっちり、ですね」

ホント、こっちも迷惑するよ。 近藤。 この話、 誰にもすんなよ」

わかってますよ」

部長と校門で別れる。

近藤は、由佳の顔が無性に見たくなる。

. 村田さん.....」

昨夜、家に帰ってから鞄から取り出した真っ白な封筒。

糊付けされていないそれの、 中身を取り出す。ポストカードが一

枚出て来た。

青空に大輪のヒマワリが、 すっと一輪。 背筋を伸ばして立ってい

る写真だった。 裏を返す。

丁寧なボールペンの字で、こう書かれていた。

「近藤くん、お誕生日おめでとう」

あの時の自分自身に流れた空気と、 今さっき聞いたばかりの澱ん

だ話。落差が有り過ぎる。

そして自分には、 澱んで後ろ暗い空気は似合わない。

•

薄曇の、近藤くんの誕生日の翌々日。

前から楽しみにしていた日.....。 近藤くんは2分遅れでやって来

た。

「ごめんね、待った?」

「ううん」

毎日のように一緒にいるのに、 いざ 近藤くんが私服姿で私の隣

にいると

すごく緊張してくるのが、 向こうにも伝わっているのかもしれない。 自分で分かる。 そういう時は、 いまだに慣れない。 近藤く

んは何も言わない。

ただ黙って、少しずつ時間が過ぎるのを待っている。

そんな風に思えるんだけど.....。 違うのかな.....。

この頃、緊張がほぐれる頃合みたいなものが、私、 自分で分かる

ようになって来たみたい。 ホームで電車が来る時間を、腕時計を見ながら待っていた。

近藤くんが、 不意に私を見る。

「あのさ」

「なに」

横を向いて少し見上げると優しい眼が私を見ている。 どきどきし

てきた。

「あのカード、すごく綺麗な写真だね。 ありがと」

いいえ」

いつからだろう。近藤くんの口癖が移っていた。

何かお礼を言われたら「いいえ」って言う。

それだけなんだけど、言われた人はびっくりするみたい。そうだ

よね.....、私もそうだったもん。

でも言われた直後、その人の頬が緩んだり、にこにこしてくれる

と嬉しくなる。

その繰り返しの積み重ねで、 近藤くん弟妹は出来ている。 御

両親なんだよね.....、きっと。

私も時間をかけたら、 近藤くんみたいに、 朗らかな笑顔が似合う

人になれるんだろうか?

なりたいな.....。

電車が来た。

私達は並んで座る。

「あ、あの」

なに?」

あのカードね。同じの私も買ったの」

?

「近藤くんみたいだなって、思ったから」

言いながら、泣きたくなった。

こんな人が沢山いる前で、 まして近藤くんの前で。 もう心配掛け

たくないのに....。

自分で自分の鼻の頭を指でつつく。

昨日、父が帰宅してから寝る迄の間を思い出す。 まるで地獄にい

るかと思った。

.....食事を取りながら、 たまたま流れていたテレビのニュー スに

私の手が止まる。

「同居の25歳の男が真由美ちゃんの頭部を殴打にて、 意識が.

「 痣が多く..... 」

「今朝死亡が確認された.....」

姿勢を正し、吸い椀に唇を付けた。 無責任な近所の女性らしき声

が、テレビから聴こえてくる。

「まだ5歳なのに」「全然、そんな風には見えなかったのに」

「可哀想」

ニュースが次の話題に移った。

顔がこわばったまま平気を装い、 食事を続ける私を知ってか知ら

ずか

真正面から母の声がする。

血の繋がった親なら、子供を殺しても罪は軽いんだよね」

「ふうん」

でも子供が親を殺すとさ、 重罪になっちゃうんだよ

何百回何千回と聞いた言葉を、 誇らしげに繰り返す母は、 まるで

呪文をかけているようだ。

私はそんな事しない。

て行く。

「おかあさん」

なに」

明日、まみちゃんと出掛けるから」

「そう。帰りは遅くなるの?」

. わかんない。でもいつもと同じ位だと思う」

母は無言だった。 そのまま逃げるように、自室の中古のパソコン

を開いた。

た。

少ない小遣いを貯めに貯めて、先月ようやく手に入れたものだっ

時々、 そのパソコンに、 両親が履歴を盗み見ているのを、 まみちゃんからのメールが一通入っていた。 私は知っている。

まみちゃんには、自分の家庭環境を打ち明けていた。

親の就いている職業は違っても、 幼い頃から寂しい思いをしてき

たようで、通じるものがあった。

ただ、 勿論、 向こうの両親の方が愛情深い人達なのだろうけれど

も。

まみちゃんのお父さんは県会議員をしている。 家には居ない事が

多いらしい。

いかにも男親らしく、 人娘には甘いらしいし、 躾は母に任せて

とは言えないだろうな。 まして、あんなに可愛くて賢い娘に何か頼まれると、 何でもイヤ

ルに書いた事がある。 話題の流れで「近藤くんの家で毎日自習してる」と、

「親に何か言われない?」

「言いたいみたい(笑)」

「任せて」

「え?」

「いいからいいから^^」

出たのは私だった。 次の日の夜、 横山議員が家に直接電話を掛けて来た。 その電話に

「あ、あなたが娘と同級生の村田さん?」

よく通るハキハキした明るい声の男性だった。 受話器を取って名

乗った直後にそう言われた。

「あ、はい」

「まみがいつも御世話になっ てます、 ありがとう」

えつ。 いいえ、は、はい。 あ、こ、 こちらこそです」

受話器の向こう側で、わっはっはっ、と豪快な笑い声が聞こえた。

いやあ、いいお嬢さんだ。

「お父さんか、お母さん。いらっしゃる?」

「母がおりますけれども.....」

代わって頂きたいのだけれども、 いですか?」

はい、ちょっと待ってて下さいね」

初めてまみちゃんのお父さんと話した。 聞き耳を立てていた母に

電話を代わる。

訝しそうな顔の母が受話器を取ってから、 急に表情を変えてペコ

ペコし始めた。

電話の内容は分からない。

でも、 時々、 快活な横山議員の笑い声が漏れて聞こえて来たのは

覚えている。

くなった。 それから、 帰りが遅い事についての、 両親の詮索めいた言葉は無

に眼を通す。 眼を通してすぐ、 消去してしまう事にしてい

る。誰かに見られたくない。

内容は、両親が表面上はにこやかにしていても、 家の中が冷え切

っている事だった。

もう何年も、そういう状態が続いている事。

自分の存在があるから、両親が離婚できないのかもしれないと悩 そのきっかけは、 まみちゃんのお母さんの浮気だと、 前に知っ

んでいる。

彼女は、父の事を尊敬しているように思える。

学校で交わす雑談でも、 お母さんの話題は出て来ない。

「うちも一緒だよ.....」

そこまで文字キーを打って、その先 の文面を考えていた時だ。

いつの間にか帰宅していた、 父と母の激しい口論が聞こえて来た。

とりあえず行って止めに入った方がいいのだろうか?

何かが割れる音がした。全身が、ガチガチに固くなった。

私の耳に、壁越しに大きな足音が飛び込んでくる。

母が叫びながら私の部屋のドアを叩いていた。

「開けて!開けて!!」

そこには母の背中や頭、 頬を力任せに殴る父と、 必死に逃れよう

としていた母が居た。

「お母さん!」

両親が転がりながら自分の部屋に入って来る。

背中に馬乗りになった父が、 母の髪の毛を引っ張りながら何度も

殴りつけ、叫んでいる。

泣き叫ぶ悲鳴が、部屋中に響き渡る。

「やめて!」

叫んだ私の足元が震えていたが、 母の悲鳴は止む事はなかっ

両親が私の逃げ場を塞ぐ。

それでも迷わずに飛び出そうとして、 よろけた私の足が、 父の脇

腹に当たった。

この前「この野郎!」 と怒鳴り、 私の頬を平手で打っ た。

次に、 尻餅を付いて廊下を滑った私の背中に、 両腕を凄い力で掴み、 廊下へと思いっ切り投げられた。 下駄箱の角が勢いよく、

がん、と当たった。

その時の事を思い出す。

なかったようだ。 ひやり、と冷たいものが背中を抜ける。 が、 今 回<sup>、</sup> 父は気が付か

いる財布を思い出したから。 部屋を出る直前に振り向いて、 布製かばんを取る。 小銭を入れて

き叫んでいる声がする。 そのままサンダルを履き、震える足で外に出た。 母が蹴られて泣

っとして私を見ていた。 ドアの隙間から漏れる悲鳴を耳にした通りかかった住人が、

顔から火が出る位、恥ずかしかった。

駅の裏側に、 小さい公園がある。そこはいつも電灯が煌々と点い

ていた。

私は、 敷地内のベンチにへなへなと座り込んでいた。

眩暈がする.....。

生まれ変わってみたい。 誰も私を知らない所に行きたい。

俯いて顔を両手で覆う自分に、 警官が肩を叩いていた。

· きみ?家はどこ?」

気が付かないうちに、私は泣いていた。

· あ、あそこ」

泣いたままで自分の家の方向を指で示す。

「どうしたの」

若い警官が丁寧に尋ねて来た言葉の響きは、 この世で二番目に優

しかった。

あ....」

言葉にならず、大声で泣き出した。

「大丈夫です、大丈夫です」と繰り返しながら。

「交番に来るかい?」

「大丈夫です……。すみません」

ぐしぐしと鼻を啜りながら、歩き出した。

例え職務でも、 他人に優しくしてくれる人っているんだな。

....、違う。

.....他人だから優しくなれるんだろうか?

自動販売機でミネラルウォー ターを買い、 少しずつ口に含みなが

ら家に戻った。

家の中に両親の姿は無かった。 母は多分、 明日の夜には帰ってい

るだろう。

あの人達は互いに、行ける場所が無い。

顔を洗い、真っ赤になった眼の周りを冷やそうと冷蔵庫の扉を開

け、氷を幾つか出した。

「近藤くんと折角……、出掛けるのにな……」

ごめんね近藤くん。 ごめん.....。 近藤に詫びながら、 タオルに氷

を包んで目を冷やす。

少しでも可愛くなりたいのに.....。 なれなくて。ごめん.....。

ぽろぽろ涙が出てくる。 もう一回、 顔を洗った。

近藤に渡したカードと同じヒマワリの花のカードは、 机の上に置

かれている。

深く突き刺す。 ベッドに入る直前、 目線の中に入ったそれは、 単純に、 私の心を

: 私

近藤くんと一緒にいてもいいのかな。

いいのかな.....。本当にいいのかな。

## 近藤(12(後書き)

とか、どうでしょう?w「やさしい声、やさしい掌」次回から、第二章に入りたいと思います。

もリアルな現実。 電車の中。 窓から射す陽の光も、 お互いの昨日の記憶も、 どっち

由佳は繰り返す。

「近藤くんみたいだなって」

言った直後に、唇をきゅっと閉じる。 鼻の頭が少し赤くなっ た事

を、近藤は見逃さない。

「嬉しい、ありがと」

ぎゅうっ. ......と、何かに胸を掴まれる感覚に襲われながら、 近藤

が由佳の耳元で尋ねる。

「手、つないでもいい?」

耳に直接、流れて来る低くて甘い声。 その響きに、 由佳の心は壊

れそうになる。

声が優しいのは.....。かすかに肩が震えた。

「だめ?」

「ううん....」

由佳の手を、 わざと、 もう片方の手で取って、 由佳に近い方の手

でつなぐ。

何の屈託もないように指を絡めながらも、 その体の緊張に気が付

いている。

「あのさ」

「なに」

「昨日、何食べた?」

「えつ」

意外な言葉に由佳の体から力が抜ける。 近藤は、 由佳の手を握り

しめる。

全然覚えてないの。 今日がさ、 ちゃ んとしたデー トじゃ

「わ、私も」

がした。 改めて由佳の顔を覗いたら、どことなく瞼が腫れているような気

赤ん坊のようだ。 ます、と。16歳のこの人の「ある部分」は、まるで生まれたての 近藤は思う。 ......女が多い家族を作ってくれた親父に、感謝して

ともかく、妹ふたりの子守役を仰せ付かった俺様の名前が廃る。 ものすごくバランスが悪すぎて、4歳児の亜紀子より酷い。

待つのもいいかもしれない。

だから大事に。大事に。

だ。 正直言って、生まれて初めてのこんな感情に、 戸惑ってばっ かり

な極端な話もある。 周りの同級生の中には初体験を済ませたのもいるし、 武田みたい

ない。 由佳を相手にして、どうすればそこまでたどり着けるのか分から 素直にそういう話には興味もあるし、早く体験もしてみたい。

が変わったような気がする。 ただ、武田が女の子を妊娠中絶させた話を聞いてから、

た。 改札を出る。 今、この人が側に居る。それだけが確かなものだ。 近藤は何も言わずに由佳の手を握る。 抗われなかっ

不意に握る手に力を篭める。 由佳が一瞬、 びくっとする。

「だめ?」

「そ、そんな」

**、じゃあ、このままでいい?」** 

「う、うん.....」

水族館の中に入ると、 夏休みということもあり、 子供連れの客で

混雑していた。

めて館内奥に進む。 最初から、はぐれそうになる。 好都合だった。 由佳の手を握りし

回遊魚のパネルの前で、人ごみが途切れた。

由佳が興味深そうに、説明文や写真を交互に眺めて少しずつ進ん

でいる。

館内の照明は、 足元が少し暗い。 段差になっている所にはフット

ライトはある。

が、手をつないでいたら、 却って転びやすくなるかもしれない。

近藤が声を掛けた。

「村田さん。足元」

頷いた由佳を斜め後ろ、 ぐっと引き寄せる。 頭が肩に付いた一 瞬、

髪の毛のいい匂いがした。

「あっ」

「気が付いてなかったでしょ、段差」

そのまま横に移動していたら、 つまずいてふたりとも転ぶところ

だった。

「あ、ありがとう……」

うん、と頷いた近藤は館内を見渡した。

こういうとこ、好きなんだね」

立ち止まったまま、由佳に問いかける。

んー。自由、って感じがするからかなあ」

· そっか」

プラネタリウムとかね、そういうのも良かったんだけど」

「うん」

私、多分、こないだみたいに寝ちゃうような気がして

照れ臭そうに言う由佳が、 二日前の宿題を忘れた言い訳を教師に

する子供みたいに見える。

その一生懸命な笑い顔を見ていたら、 眩暈がしそうになった。

くなるんだ。 なんで由佳の瞼が腫れているのに気が付いてから、 訳わからん。 こんなに切な

- 「あれは確かに眠たくなる」
- 「でしょう?」
- て言ったの。夏休み。 「中学の時にさ、弟が" にいちゃん、 プラネタリウム行きたい" つ

息を立てて寝やがって」 だから連れてった。部活休みだったし。そしたらさ、ぐうぐう寝

- 「あの弟さんが?」
- そう。託児所の先生に自慢出来るネタが欲しかったんだろうけど」
- · そうなんだ」
- 「.....俺さ、村田さんが」

近藤にぶつかって来た。 そこまで言いかけた時、 年配の女性が、 さっきの段差によろけて

「わ.....っ」

近藤の存在がなければ、 その人はひっくり返っていただろう。 近

下 こここと 藤も転びそうになった。

「大丈夫?」

近藤に一生懸命謝っている。 由佳が近藤に問いかけた。 女性と、友人らしいもう一人の女性が、

おばさんは、ふたりとも重たそうなバッグを肩に掛けていた。

- 「あ、大丈夫、大丈夫ですから……!」
- 近藤は、そそくさと由佳の手を引っ張るように、 渡り廊下に出た。
- 危険はどこにでも潜んでいる、 村田さんに「足元、気を付けて」って言ってる場合じゃなかった。 って分かったぁ。 参った....
- 「ホントだね」

ふたりで顔を見合わせて笑った。

「 何か食べようよ。 もう1時だし」

ふたりで、オムライスとアイスコーヒーを頼んだ。 陽射しが射込んで来たテラスで、 向かい合わせになっている。

由佳の白い綿のブラウスが眩しい。耳元に、 飾りの付いたピンが

見 え る。

それで両サイドの髪の毛を留めていた。

あのさ村田さん」

ん? !

「何か、欲しいものない?」

え

「俺ばっかプレゼント貰ってるの申し訳ないよ。 誕生日、 ちょっと

しか違わないのに」

「そんなこと.....」

「いいじゃん別に」

近藤の言葉は、 どこまでも屈託なく由佳の耳に届く。

「あ、あの。私」

なに?」

そ、その前に聞いてみたい事がある」

なに?」

由佳が息を吸った。

こ、近藤くんは、 私と居て、 つまんなくならないの?」

近藤が眼を丸くした。

「ならない。思った事ない」

なんで?両親から散々言われてきたのに。 どうして?なんでそん

なに、すっぱり言えるの?

自分を凝視する由佳の対面にいても、近藤は少しも動じない。

家の中さ、 俺んちめっ ちゃウルサイのよ。 だから村田さんと居る

と落ち着く」

そ、そうなの?」

して嘘じゃない答え方だった。 由佳が予想もしてない答えだった。 そして、 それは近藤には、 決

栓が必要な位」 女が3人もいるんだよ?ピーチクパーチク。 酷い時は一日中、 耳

んだよ、と言った。 高校受験の時に、 母と妹がいる間に問題集を放り投げた事もある

「ぶつけたの?」

今度は由佳が眼を丸くした。

「ぶつけない。 それはしないけど、 俺の部屋の前だよ?そこでさ。

洗濯物とか持ったままで」

「本当?それ」

「疑ってるだろ」

「うん」

「じゃあ今度、家に来た時にその問題集を見せてやる。 後ろのペー

ジが外れた所を」

由佳が笑い出した。信じられない、 近藤くんがそんな事するなん

て、と。

「ちゃんと見ろよ?俺は嘘はついてないから」

「私、気にしすぎなのかな」

だと思う。村田さんの方こそ、俺といてどうなのさ」

言うんじゃなかった。 瞬、 近藤は思った。 由佳がサッと真顔に

戻ってしまったから。

由佳は少し目線を横に外す。

近藤くんと一緒に居たら、 悩んでいた日々に、 パッと陽が差して

消えていくみたいだ。

ない。 大げさな否定もされないし、 ましてや無理に添わせられる訳でも

伝えてくれる。 たぶん ぜんぶ。 近藤くんは思っている事があったら、 私に

少しずつ腫れが治まっ た眼で、 近藤を観て告げる。

- 「楽しいよ。でも、ずっと気になってたから」
- 「楽になればいいんだよ」
- 「ら、楽に?」
- 「そう。 わがままになればいい。 どうせ俺の前じゃ hį 他に誰もい

ない」

「 他 に 」

「こないだ、 シャーペン持ったまま寝てたろ?あれ結構、 嬉しかっ

たんだ」

「え?」

「俺は」

自分が言っている言葉の意味に気付いた近藤も、 どきどきしてき

た

「すごく寛げたんだ、あの時」

.....うん。 一緒にいたら楽しい。 だから別に何も要らない

真面目な顔のまま言われた。由佳にしてみれば、 本心からの言葉

だった。

「それはだめ、それとこれとでは話が違う」

「だって要らないもん」

いつのまにか、注文していた物が来ていた。

. じゃあ今日中に考える」

?

**一受け取ってくれる?」** 

う、うん」

後はふたり、別段、会話も交わしていない。

ほとんど黙ったまま、手をつないで進路の矢印の方向に行儀良く

歩いて行った。

ある。 時々、 水族館の出口手前、 他の人にぶつかったりしないように声を掛け合いながら。 ぬいぐるみや記念品を売っているコー

近藤は「これは亜紀子に」と言いながら、 ペンギンの小さなぬい

ぐるみを籠の中に入れた。

あった。 そして、ラッコのぬいぐるみを指差した。 あれは止めとくか。 隣にはイルカが置いて

「村田さん。あれ、可愛くない?」

あ、ほんと」

「じゃあ決まり」

え

同じ形の、チェーンが付いている、 大きめなストラップにもなり

そうなものを二つ入れる。

「うっしっしっ。 ふたりで鞄に付けようぜ」

部長が、臨時女教師と、このマスコットを鞄に付けている事に、

近藤だけが気が付いていた。

「そうだよ、俺が尊敬する鳥飼部長みたいに。 やーらしーなーもう

\_

あの堅物の部長がねえ。 あんな御色気ぷんぷんの.....。 にか。 由

佳に言うのは止めとこう。

「こ、近藤くん?」

いいのいいの。やってみたかったんだよね、

にやにやしながらレジに向かった。 脇に菓子類やCDが並んでい

る

波の音、というタイトルのCDがあった。それも手に取って、 眺

めてから籠に入れた。

由佳を見ると、 クリアファイルやらハンカチタオルを籠に入れて

いる。

会計が終わって、ふたりで一旦、館内を出た。

歩きながら近藤が、 由佳にラッコとCDを、 ぽんੑ と渡した。

「俺からの「お誕生日おめでとう」だよ」

......ふ、二つもいいよ」

· いいよ。そのつもりだったんだ」

「あ、ありがとう.....」

いいえ。 それよりも、 リボンとか掛けてなくってごめんね」

「いいの……」

をしてる.....。 小さな子供が、 無造作に手渡された小さな袋を、 親から何か欲しかった物を、 両方の掌に乗せた由佳は 貰ったばかりの表情

れらの景色の全てを見ていた。 夏の夕焼け空が由佳の頬を照らしている。 近藤は眼を細めて、 そ

•

いつものように、 向かい合わせで勉強している。

部屋の隅に置いている由佳のカバンを見る。

貝殻を両手で抱いた灰色のラッコが、 空調の風で揺れていた。

近藤が、 何の気なしに背伸びをする。 そのまま、 由佳に言う。

. 村田さん」

はい?

由佳が顔を上げた。

「明日から合宿なんだ」

「そうなの?」

「うん」

「じゃ、今日は早く帰ろうか?」

由佳が赤くなって下を向く。だめ。いつもと同じがいい」

っさみしいな」

小さな声が聞こえた。

3泊したら帰ってくるよ。 近藤がいつもの通りで居られたのは、 えっと。 7日だったかな」 ここまでだった。

「そう」

由佳の心底、 寂しそうな顔を見た。 それを見た瞬間に、 近藤の胸

に強烈な痛みが走る。

近藤自身には自分の鼓動が、 絶え間なくはっきり聞こえてい た。

「隣りに座ってもいいかな.....」

うん」

自分の鼓動を聞きながら座った。 黙って由佳の手を握り、 指を絡

ませる。

握り返す。 由佳は自分の指先が、 かすかに震えたのを誤魔化す為、 緩い力で

「村田さん.....」

近藤の声がかすれている。

由佳はおどおどしながら、 俯いた顔を横に上げた。

「あ、あの」

近藤が何か言いたそうに唇を動かした。 言葉がふたりとも出て来

ない。

どんな顔をしていいかも分からない。

だけしか出来ない。 お互い、 心臓が口から飛び出そう。 じっとお互いの眼を見ている

かすれた声で近藤が続けた。

、くちび」

とも「きゅ」 とも付かない音が、 由佳の唇から漏れた。 近藤

の眼を見つめたままだ。

「あ.....、さ、触ってもいい?」

また「きゅ ......」みたいな音が由佳の唇から漏れる。

由佳は半開きの唇のままで、眼を閉じた。近藤の指が、 空いている方の手の中指と人差し指を、 恐る恐る、近付けて行く。 ゆっ

とそれに触れる。

はぁ.....、と溜息をついたのはどちらだったのだろう。

すかに滑らせる。 柔らかくて温かい感触を確かめながら、 由佳の唇の上に、 指をか

眼を閉じた由佳が、片手で近藤の腕にしがみつこうとする。 が、

迷うように宙に浮いていた。

たったこれだけの事なのに、ふたりともその先、どうしてい いの

か分からない。

近藤が由佳の彷徨う腕を見つけた。 指を絡ませていた手をほどき、

自分の腕へと導く。

由佳の心臓が痛くなる。導かれた掌が、 震えながら近藤の二の腕

を掴む。

筋肉が綺麗に付いた腕は骨っぽくて熱い。 由佳が瞼を開けた。

こないだの若い警官のように、優しく、 いたわるような眼がそこ

には有った。

どうしよう、 胸が痛い。 自分の嫌な記憶の全てがフラッシュバッ

クしてくる。

· あ、あの」

小さな掠れ声。由佳が近藤に言う。

「.....なに」

指を唇から離して、近藤が答えた。

「わ、私」

「 ん?」

ゃ やっぱり」 由佳を途中で制して近藤が言う。

言いたいことあるなら言ったらいい」

近藤くんは」

?

ち 違う世界の 人に見える」

..... なんで?」

問いかけながら、 由佳と指を絡めた。

.... そう?」

明るいし」

..... それに、 赤の他人, だから... 優しいの。 きっとそうな

由佳が続けた。

"他人"」

違うよ」

近藤の我慢が崩壊する。 横から由佳の体を抱きしめた。

こっ

由佳が抵抗したそうに動く。 今だけ我慢しろ。ぎゅっと力を篭め

て、肩や背中を抱きしめる。

ってた。俺」 あのさ。 ......こないだ村田さんが何を言いたいか、 ちゃんと分か

触れる肩から背中の、 自分の肩の辺りに由佳の額を押し付ける。 頼りない温もりが愛おしい。 掌で髪の毛を撫でた。

村田さんは、 強い人だと思うよ」

..... ううん」

強いんだ」

違う」

鎖骨の辺りで、 くぐもった声がする。

ಠ್ಠ 家で何があっても、 壊れてるはずなのに、それが当たり前だと思ってる。 普通の顔をして学校に来てる。 俺んちにも来 そうだろ

?壊れてんだよ」

由佳が、 しゃくり上げるような声を上げ始めて、 ばたばた動く。

我慢しる。 今から語るぞ。

ち込む。 妹達に「おにいちゃん大っ嫌い」って言われたら、正直3日間は落 何回かそれで学校サボって。 アキバをフラフラしてた」 俺なら無理。 たったそれだけなのに、 ちょっと顧問に叱られたら学校に行きたくなくなる。 二つ重なった時とか最悪。 一学期、

学校をサボるのは止めた い子が、 「でもさ。 必死で。 俺には出来ない事を、女の子が頑張ってた。 俺以上の事があっても。 何でだか分かる?」 俺は気が付いた時から、 兄弟もいな

ううつ、と泣く声が漏れてくる。

風に思えない。村田さんの事、一人にしたくない。 くない。一緒にいたいんだ。俺が」 尊敬してる子と一緒にいたい。 赤の他人なんかじゃ ぼっちにさせた ない。 そんな

腕の力を完全にほどいて続けた。

違う世界の人、とか悲しい事、言うなよ」

うやくネットで探し当てて買ったの。それでようやく昨日届いたの 「見てよコレ。 おろしたてのTシャ 鼻水。もう......。やだな。俺さ、このTシャツ、 ツに、 由佳の鼻水がべったり付いていた。

ように恋は上手く行かない。 涙を拭きながら、由佳が「 プッ と噴き出した。 テレビや映画の

「合宿に持っていくんだよ?」

朝 7 晴

向かって走っている。 近藤は陸上部員全員と、 マイクロバスに乗り込んでいた。 千葉に

てい 陸上部には 顧問がふたりいて、 もう一人の佐々木教諭が運転手を

千葉の合宿には、 佐々木だけが「別荘」 と呼んでい る 普通の民

家で過ごすらしい。

上級生達は、石井と一緒になって「今年は何回、 後続車からクラ

ク ションを鳴らされるか」

女子の先輩達と、げらげら笑いながら数えている。

おう佐々木一。そろそろ坊主達をトイレに連れてったれや」

佐々木が、 ......あ、あと5分程で!」

った。 一番後ろの席に座っている石井に聞こえるように怒鳴

「ほんまか。 病院連れてって、って俺は言うてへんからな?ト

やでトイレ」

鳥飼部長の噴き出す声が聴こえた。

「おまえの運転テクで、よう教習所が大型免許皆伝したと思うわ、

不況やったんかいな」

バスの中の全員が爆笑し始めた。

「近藤。一年生に配り物あんねん。 ちょっと来い

前方から2番目の通路側に座っていた近藤が、席を立って動く。

何ですか」

合宿中の時間割と、 練習コースの説明が書いてあるA4の紙だっ

た。

一年生の参加人数は、 男子は近藤を含めて1 女子は

だった。

柳楽、寝てんの?」

「ぐうぐう」

近藤の隣りの座席が柳楽だ。

あいつ凄いな。 昨日な、 部活で5キロ走って、 水泳10キロやて」

へえ」

周りが、 口々に柳楽を誉めそやす。 俺には出来ない、 ے

俺にも無理です。 言いかけた時に鳥飼部長のスポーツバッグが目

に留まる。

イルカのキー ホルダー が付いていた。 鳥飼の席の隣りは空い てい

部長」

耳打ちした。

部長ったら、 カハッ、声を上げて鳥飼は周りを見渡した。 誰かさんと水族館に行ってるでしょ にやにやした顔で近

藤が続けた。

ですよね?」 「同じもの、 見ちゃった。 ^ ^。 俺が買ったのは違うけど。 プラダ、

いたずら坊主の眼、そのもの。

「近藤おまえ.....。言うなよ.....?」

日焼けした顔の鳥飼が真っ赤になっている。 日頃シゴキ倒されて

る、恨みを晴らすチャンス。

「言いませんよ。 あら、 顔が赤いっすよ部長。 うっひゃっひゃっ」

渋滞していたせいもあり、 佐々木教諭の「別荘」というか「実家」

に着いたのは午後1時。

佐々木の両親が亡くなった後、以前は佐々木の妹が使ってい しかし独身女性が使うには、その家はあまりにも広すぎた。

妹は近所に引越し、その広い家は空になった。

周辺は、空気もまあまあ綺麗で、 佐々木が年二回、 風通しの為に部活の合宿に使わせて貰っている。 公道も広く、 合宿場として使い

勝手は悪くない。

で身長が伸びなかったら 大柄な石井と対極的に、 小柄な国語教師の佐々木は「中学3年間

一時は近くにある競馬学校への入学を、 真剣に考えていたらし ιļ

昼食を大量に作って、 佐々木の叔母と妹が部員を迎えてくれてい

た。

のところに書き込んでいた。 している頃。 近藤がマイクロバスの中で、柳楽のイビキに呆れたり感心したり 由佳は、手帳を広げ「近藤くん自習・再開」と、 8 日

ヒマになっちゃっ 写真立ての中の、 ヒマワリのポストカードを眺める。 たな.....」

に放り込んで来た時も。 をつないだままでいた。鼻水がバリバリ着いたTシャツを、 昨日はあれから、奈津子と芳樹が帰宅してくる頃まで、 近藤と指 洗濯機

近藤が、体を離すのを嫌がったから。

村田さんと逢えなくなっちゃうから」そんな風に言って、 ずっと。

.....強い人だと思うよ。

低く柔らかい声が、耳の中に残っている。 昨日の記憶を、

始めていた。

だんだん、 自分の体が温かくなるのを感じていく。

「自分の事、そんな風に言われた事ないよ?」

じゃあ俺が一番初めか」

「うん」

ふうん。

人ってさ、長所って、 なかなか分かりにくく出来てるもんなんだ

ぜ

「ばれたか」 「プッ。 そんな事言う俺、 カッコイイって思ってるでしょ?」

その後、近藤は真顔になった。

でも、 俺の正直な気持ち。 村田さんは強いし、 頑張る人だけど」

だけど.....?」

「もっとリラックスしても、いいんだよ」

由佳の表情が曇る。近藤は、 指に少しだけ力を掛け てやる。

リラックスできる場所で、そうしたらいいんだよ」

うん、と頷いた由佳に、近藤が続けた。

芳樹や奈津子の試合前には、 いつも言ってやるようにしてるんだ」

試合前?」

そう。年齢別に試合とかやるんだよ。半年に一回くらい

「そうなの」

「うん。全国レ ベルまで行かなくてもさ、兄としては少しでも上で

あって欲しい」

「そうね」

なくて。" 始めた頃は、 ひたすらリラックスしてみろ, めちゃくちゃ上がり性だったから。 って言ってやったの。 ガンバレ"じゃ 俺」

「それで?」

そしたら3回目の大舞台で、ふたりとも良い成績が出たんだよね」

「そうなんだ」

中学の陸上の顧問がそうだった。大会の前に、よく言われたよ

近藤くんの周りって、いい人ばっかりだね。 いいな」

たまたま、 顧問がいい先生だったから。 それで陸上が好きになっ

由佳がしみじみ言った。

たんだ」

「すごいな.....」

すごくないよ。 村田さんに、 ずっと言いたかった。 楽になっ

いいんだって」

「水族館でも言ってたね」

そうだよ」

近藤が、 由佳の顔を覗き込む。 不意の事なので戸惑った。

るのかって」 誕生日の夜に、 親父に言われたの。 おまえ、 女の子を連れて来て

「何て言ったの?」

じゃん」 「正直に言ったよ。 リビングで勉強してるよって。 だってその通り

「うん……」

堂々としていたいんだ。 村田さんの事が好きだから」

好き、 この言葉を近藤の口から聴いたのは二度目だった。

(好き、か....)

由佳が気付く。 時々、ずきずき胸が痛くなる理由に。

近藤くんみたいに、ストレートで明るい人になりたい。

その眩しさを、 この部屋は、 毎年、夏が来る度に陽射しを眩しく感じる。 去年までは持て余していた。 でも今年は違う。

今頃、近藤くん何してるのかな.....。

じろぎもせずに思う。 両手の掌を広げて眺めた。 この手をつないでくれる人の事を、 身

あの時、 勇気を奮って、 近藤くんに声を掛けてみて良かったな...

:

リラックスしたり、 隙がない」という事が有得ない、 本当は気が付いている。近藤だって普通の" 軽くパニック状態に陥ったり、 そんな事にも。 男" 繰り返す自分に だということに。

そういう隙間を見つけた時の近藤の、 眉毛がすつ...と上がる癖に

も、気が付いている。

つもりはなかった。 近藤には多分、 自覚はないだろう。 曲佳も、 それを本人に告げる

でも.....。

る理由もないし、 そこまで考えて、 もしも、 万が一にでも近藤が「 断れるほどの。 首を振る。 その先」 何か"が起こるとも思えなかった。 を求めて来たら.....

単純に、自分の唇に指を乗せてみる。

- あ.....」

眩暈がした。 自分もただの女に過ぎないと、 由佳が気が付いた一

瞬だった。

その夜、近藤の夢を観た。

乾いた熱さを持った掌が、 自分の頬を撫でている。

頭を、 している。 自分をいたわってくれるように緩い速度で、 すっぽりと包み込む。 ただ黙ってそれを受けていた。 やがて両方の掌は自分の 何度も何度も繰り返

それでも「 近藤の顔を、 恥ずかしくて見る事が出来ない。 いよ」と言いながら、 いつまでもそのままでいてく

陸上部員は毎年夏になると、 玄関を上がると、 いい匂いがして来た。 佐々木教諭の実家で合宿をしている。 石井が襖を開けた。

「わあ」と歓声が上がる。

広さに驚いている。 軽めの献立が膳に並べられていた事と重ねて、 一年部員が部屋の

にしていた。 二年生と三年生は、毎年、襖を顧問が開けてくれる一瞬を楽しみ

唖然とした柳楽が、 十畳の部屋が縦に四つ並んでいる。 近藤に話しかけた。 水周りは一番奥にあった。

「なあ」

ん ? .

「近藤んちも、こんだけ広いの?」

「まさか」

「だよな。修学旅行かよコレってよ」

柳楽んとこは、市営住宅だったっけ」

· うん。市営なら三世帯が住めんよ」

世の中って不公平だなあ、 ぼやきながら柳楽が荷物を肩から下ろ

す。映画が撮れるぞ。

珍しいな。 柳楽がそんなに愚痴を言うなんて」

ちっ、舌打ちをして柳楽が眼を細めた。

「だってよ、 一所懸命やってても俺には彼女も出来ねえし、 家は狭

いし貧乏だもんよ」

「彼女ねえ....」

俺は人生を恨むよ。 まだ十六なのに、 どっ か捨ててきちゃっ た気

がするよ」

そう言いながらも柳楽が笑っていた。

特待生だっけ?」

- そうよ、 だから高校在学中は陸上を辞めたくても辞められない」
- 「初めて聞いた」
- いと思ってるから」 だって初めてだもん。 人に話すのなんて。 馴れ合いって気持ち悪
- 「ふうん」
- 「近藤みたいな家に生まれたかったよ」
- うち?落ち着いて来たの最近よ?離婚の話もあったよ。
- へえ、そんな感じは受けねえけどな」
- 俺ね、 暗いのが嫌いなの。 暗くなってても良い事ないし。
- なるほどねえ」

柳楽が感心したように唸った。

石井の号令が掛かった。 女子部員は襖を閉めて佐々木と集まる。

してくれる事。 近くに住んでいる佐々木の叔母家族と妹が、 食事と風呂の世話を

茶碗洗いは自分でする事。 風呂の掃除は男子部員がする

トイレの掃除は女子部員でする事。夜遅くまで騒がない事。

近所の方と朝夕、 御逢いした時は挨拶をする事。地元の子とは喧

嘩しない事。

修学旅行みたいな注意事項を、 ひとしきり石井が指導した

後で言った。

にするから」 「先に配った用紙にもある通り、 夕練は午後4時。 それまでは自由

- 「先生、晩飯は?」
- 「夕練の後や」

襖を開けて、食事にしようと石井が告げる。

「メシ食おうぜ」

それを見て同級生達も寄って来る。

「修学旅行みたーい」「広ーい」

女子が嬉しそうな声を上げる。 二年の先輩が一年の集団に声を掛

け た。

「おまえら、 あとで智恵子さんと叔母さんに挨拶しとけよ

「は」い

て言った。 女子全員が声を揃えて返事をした。 食べながら先輩達が口を揃え

食い終わったら風呂場に行ってみな。 プチ銭湯だから」

「そうなんですかー?」

`改装したんだって。風呂場と流し」

えー」

女子は興味津々に先輩の話を聞いている。

合宿に使うようになってから、佐々木は貯金をはたいて改装費に

当てたらしい。

「近藤が入部するのが遅すぎたよなー」

誰かが冗談で言った。

ホントだ。せいぜい1980円で親父さんにやって貰ったのに」

うはっ、止めて下さいよう」

貯金はたいちゃったから、佐々木先生は今だに独身じゃ んか」

余計な御世話だ!」

佐々木が笑いながら怒鳴った。

夕練は、合宿所から15キロ走る。

ただ、顧問から3000以上を走るように指示された部員は、 2

0キロ走る事になっていた。

男子一年生部員では、 近藤と、 上野と青木、 柳楽が20キロ走る

ように言われていた。

「とりあえず先輩に付いて走ったらいいよな」

軽く行くかー」

などと言いながら走る。 走りながら思った。 早く長距離トレー

ングに慣れないと.....。

夕食の後は、入浴だ。

正直言うと、 集団での入浴と言うのは憂鬱になる。 最初だけ我慢

するとしよう.....。

曇り硝子の引き戸を開けた近藤は、 ギョッとした。

「ホントに銭湯みたいだ」

シャワーカランが五個も並んでいた。 浴槽も広い。 座ると上野が

やって来た。

開口一番「近藤くんつ」と、 女子の口調を真似て言われた。

「な、なんだよ気持ち悪いな」

「お、おっきいよぅ」

..... バカ!」

だって.....そんなの.....っ。無理.....っ」

そう言いながら、上野が笑いをこらえ切れずに、 噴き出した。

慌てて体を洗う自分に、 浴槽に浸かっていた柳楽が「いいよなあ」

と言う。

「おまえらなんか大嫌いだっ」

風呂場にいた全員が、 外にまで響くような声で爆笑になった。 小

突いたり小突かれたり。

動物の甘噛みみたいな、よくある男子のじゃれ合いが始まった。

その夜、近藤は由佳の夢を見た。

ふたりで海にいる。手をつないで防波堤に並んで座っていた。

何も言わず、いつまでも隣にいるだけ.....。

**波の音が聞こえるだけの、不思議な夢だった。** 

夏休みは明日で終わる。

藤の家を訪れた。 由佳は近藤の合宿が終わってから、 夏休み中、 決まった時間に近

向かい合わせだった。 そして、決まった時間に送って貰って帰宅する。 ほとんどの時間、

違っていた。 読書感想文を書いたり、 問題集を開いていたり、 互いにする事は

本を読んでいるだけの時もある。

の時間が好きだった。 夕方、奈津子と芳樹が帰って来る迄の、 静かな時間。 近藤は、

時折、 由佳が小さな欠伸をする。その後、 決まって近藤も欠伸し

そんな時間が、近藤にも由佳にも積み重なって行く。 由佳が首を左右に傾げる。

「そ、そうみたい..「肩こり?」

「うん」

少し、

休もっか」

近藤が席を立つ。由佳が言った。

「手伝う」

「座ってていいよ」

由佳の目の前に、 ミネラルウォー ター のペットボトルが置かれた。

ありがとう.....」

いいえ

近藤の背中を観ながら、 由佳がぽつんと言った。

「昨日ね、まみちゃんから電話があったの」

. ふ む

背伸びをしながら近藤が椅子に座り、 由佳の眼をまっすぐに見た。

「武田くん、学校辞めちゃうんだって」

「知ってた」

「知ってたの?」

うん」

· そうなんだ」

成績優秀女子階層にまで、 そんな話が流れてるのか」

「まみちゃんね....」

由佳は言い淀む。 この先の、 近藤との空気の展開が読めない。

横山が?」

. 怒ってた」

、えっ、そこまで知ってるの」

ん、まあ.....。まみちゃんだけみたいだけど」

「そうなの?」

だって、相手の女の子って、 、そうだったのか。 近藤が深い溜息をついた。 議員の後援会の人の子供さんだもの」 世間は狭

それに、 高校一年生の女の子には他人事でもキツい話題だ。 由佳

は思い詰めた顔をしていた。

「横山が怒ってたって想像つかないね

私も、 あんなに悲しそうな声のまみちゃん、 可哀想だって思った

か -

「そう」

「武田くんの事、私、すごく苦手だったけど」

うん」

夏休みの間ね。 時 々、 電車の中で会った時に挨拶してくれてたの」

- 「ふうん」
- たまに、 ものすごく寂しそうな顔してる時があった」
- 「そう?」
- 少し前....、だったか、 コンビニで求人誌みててね」
- 私に気が付いた時、 読むの止めて声掛けてくれたんだ」
- · それで?」

近藤の眉毛が、すっと上がった。 由佳はそれを見てしまう。 心が

ざわざわしてくる。

「たいしたこと、 全然ないのよ。 外で5分位、 話しただけだもの」

「何を?」

家に居辛いっ て。 両親が自分の事を捨てて出て行って

じいちゃん、 ばあちゃんとこに住んでて、色々して貰ったのに申

し訳ないって。

家の近所も何となく、 つまんないからフラフラしちゃうって。 そ

「うん」

って。近藤くんの事も言ってたの。 「ようやく見つけた、大事な子だっ たのにって。 近藤は委員長の事を、 大事にしてたのに ほんとに

大事にしてるんだねって」

でも傷つけちゃったんじゃんか。 誉められても余り嬉しくない な

...\_

そうなんだけど.... 私 もしも自分が男の子だっ たら、 武田く

んみたいに」

「言うな!」

近藤は言い切る。

.... ごめん、

なさい」

由佳が俯いて、小さな声で近藤に詫びた。 ごめん کے

村田さんは、村田さんだから、あんなになってない」

ま、 まみちゃんには、 その話はしてない

どんな理由があっても、 女の子を泣かせる結果になったんだ。 同

情の余地ない」

「そうね.....」

気まずい空気が流れ、それを打ち消すように近藤がペットボトル

日生り言いこい事は分かる。弐日に口を付ける。

由佳の言いたい事は分かる。武田も由佳も、両親が機能していな

武田は、ああいう行動に出た。

んな眼をしてる。 横山からの電話がキッカケで、畏れを呼び戻している。 由佳はそ

同類ではないか。 人間なのではないか。 ......両親から受けるべき愛情が行き届いていない自分も、武田と ......自分も、近藤に責められるべき価値しかない

由佳は、そう言いたいのだ。

かる。 坦道、 注意深く観察しているので、 大体、 由佳が言いたい事は分

それに、あんな顔してたら。

な理由があった。 近藤には近藤で、 「女の子が妊娠中絶してしまう」話は、 大嫌い

......話した方がいいのかどうか迷った。

に 由佳が小さく見える。叱られたと思っているのだろうか。 違うの

近藤の声が、 座ってもいい?」 俯いた由佳の耳に優しく聴こえた。

「うん....」

椅子を持って、由佳の隣に座る。

息をついた。 村田さんは、村田さん。 ゆっくり言いながら、手の甲を包む。 多分、男になってても、 由佳がようやく、 変わらない」 ホッと溜

、私が男でも、こうやって自習してくれるの?」

「一緒に遊ぼ、って言う」

「毎日?」

由佳がくすくす笑っている。

「言って欲しい?」

「うん」

「そうするよ」

うん

「...... こうやって」

に向く。 近藤の空いている掌が由佳の頬に触れる。 自然と由佳の顔が近藤

うになる。 由佳が目線を落とす。 さっきと違う"ざわざわ"で、 心が潰れそ

いる 「男同士だったら、 こうやって出来ないけど、 いつでも貴女の側に

「ゲ、ゲイだよ」

近藤は続けた。 眼を伏せたまま、 冗談で逃げようとする由佳の頬から手を外し、

いいよ別に」

「何でそんなに善い人なの?」

近藤は体を開き、言った。

. 親父の仕事が上手く行かなかった時にさ」

<sup>'</sup>うん」

「夫婦喧嘩ばっかりしてたんだよ、うちの親。 奈津子も芳樹も毎日、

泣いててさ」

h

なかなか顧客が就かなくて、 ほら、 あのドラフター

首で近藤が示した。

磁石で貼り付けてた」 今でも覚えてるよ。 テラス側のドラフター、 母ちゃんが離婚届を

そう

あれって2枚要るんだな、 2枚貼ってあったよ。 母ちゃんの本籍

地の関係で」

「それで?」

「その晩、親父が海外の仕事を持って来たんだ。 仕事貰って来たの、

半年ぶりでさ」

「半年って長いね.....」

「喧嘩しても強気一辺倒で押し切ってきた親父がね、 泣いちゃって

さ。離婚届を見た時」

......それで?」

母ちゃんは「泣くより先にハンコでしょ!」 なんて。 冷たいのな

んの

「ふうん」

「開き直ったら女の方が強いな、我が子ながらそう思ったよ」

「親父にしてみりゃ、 起死回生の気分だったんだろ。ようやく回っ

て来た大仕事だし」

「うん」

ん。離婚するんだったらしてもいい、 だから、 この仕事だけは一

緒に行ってくれって」

「夫婦で?」

「そう、たった一週間位だったかなあ。 帰って来るまで、 俺ら子供

は不安でさ」

「ふうん」

ばあちゃんちから小学校に通ってた俺は、 色々と決意してたのに

さ

?

「いつまで経っても母ちゃんは家にいるし、 俺に「荷物まとめて」

とも言わないし」

うん」

「離婚どころか、亜紀子が出来ちゃってた」

うっそ」

嘘じゃないって」

近藤がげらげら笑い出す。

れちゃってさ」 「ばあちゃんに言ったの。 そしたら、 芳樹も海外の子、 なんて言わ

. やだ、それ絶対に嘘だと思う」

つられて由佳も笑い出した。

「いや、今度こそは本気なんだって、 したんだって。 じいちゃんばあちゃ んも決意

転校先とか託児所も変わるし、 色々と。 親なりに」

そしたらどんどん母ちゃんのお腹おっきくなるしさあ」

うっそ」

絶対に嘘だあ」

「笑っちゃうだろ?でも実話なんだよね」

「ふうん」

だから夫婦喧嘩始まると、 俺は言うの。 離婚届、 貼っておきまし

ょうか、って」

「喧嘩できなくなるじゃない」

そう、それで夫婦喧嘩は収まるし、 芳樹もべそかくの止めるの」

ふうん」

の気持ちって....。 善い人なんかじゃないんだ。 本当に寂しかったんだろうなあって思うから」 全 然。 ただ、 あの頃の奈津子や芳樹

であるはずないじゃんか。 近藤は内心思う。

眼の前の由佳の癖とか、 向かい合わせになってるときに見て全部

覚えていく。

想像の中で、 何十回も何千回も犯す時に使うから。

犯しながら、 どれくらい泣かせた?どれくらい、 その

悲鳴を唇や性器で塞いだ?

数え切れない位....。

だから全然、善い人なんかじゃない。

「村田さんは」

近藤は、再び、由佳の顔を覗き込んだ。

?

「自分が武田みたいな人間って思ってたんだろ」

.....うん」

違うよ。それは違う。 武田は他にも、 そういう事してる子がいた」

「でも」

両親がいなくても、ちゃ んと育ってる人間なんかいくらでもいる」

゙..... まあ、そうだけど」

合宿中、初めて柳楽と喋ったよ。あいつんとこは父子家庭だ」

「そうだったの」

父ちゃんは朝から晩まで仕事。 自分ひとりで留守番しながら育っ

てる」

「ふうん.....」

でも女の子を連れて来たりとかしてない。 ŧ あいつは性格に問

題あるけど」

由佳は唇をきゅっと結んで、 何かを考えているようだった。

「いつも.....、ごめん」

目を伏せて近藤に詫びた。

謝らなくてもいいよ.....と言いながら、 近藤は由佳の手の甲をさ

すった。

「いいよ」

奈津子と芳樹が、 玄関のドアを開ける音が聞こえる。

•

新学期が始まった。

近藤と由佳のクラスには席替えがあった。 由佳はまた、 一番前の

席になった。

どこの高校のどこのクラスでもそうだと思うが、 後方になる程、

フリーダム状態だ。

前の席を取った。 騒々しいのは苦手な由佳は「目が悪いから」という理由を付けて、

近藤はどこでも良かった。

「余ったとこでいいよ」

日直の女の子に言って、さてどこが余るかな.....、 と思って見て

い た。

また一番後ろになった。 あんまり机を動かさなくて良い。 柳楽が

隣に来た。

「またオマエか」

うるせえな」

柳楽に鼻で笑われた。

・近藤。 教科書、見せて貰うからな」

「やだよ」

「嫌なヤツだな」

置いとけよ。弁当は忘れないくせに」

隣から蹴りを入れられた。

それを見ていた、 前の席の女子が「柳楽くんと近藤くんって、 ١١

いコンビだね」と言う。 その子は女子陸上部で、 短距離専門に走っている。

ふたりで声を合わせて言ってしまう。「やめてくれ」

放課後、 あ」と近藤が声を上げた。 いつもの通り由佳と一緒に帰る。 並んで歩いている途中

「どうしたの?」

「村田さん、今日のお勉強は中止にしよう」

-?

減りだった」 「その代わり、 アップシューズ買うの付き合って。 もう踵がめちゃ

「いいよ」

制服着たままで悪いんだけど、アキバまで、 い い? !

「うん」

ショップがあった。 秋葉原には、近藤が中学一年の時から、 懇意にしているブランド

中にある。 昔に組み立てたプラモ「最上」を置いてある店は、そこに行く途

た。 はぐれたりしないように、 平日の夕方でも、そこはやっぱりアキバなので人が多い。 近藤は由佳と手をつなぐ。 路地に入っ

てある。 間口が狭い店舗の中は、 陸上選手用の為の様々なシューズが置い

陳列棚が窮屈に並ぶ。 狭い店だが、 結構有名だった。

近藤が欲しかったアップシュー ズは、店舗の一番奥にあるはずだ

った。

レジの手前に由佳を残し、近藤は奥へと進む。「ちょっと待ってて。すぐ戻る」

かせた。 ひょい、とアップシューズが並べられている棚の所に、 あるかな、 ځ 首だけ覗

らに背中を向けていた。 自分と同じ制服のズボンの誰かが、 壁の突き当たりにいる。

**ちゅっ.....。** 

音が聞こえた。

黙ったまま棚の方に体を動かして、その後ろ姿の腰の辺りを見る

と細く、白い指があった。

ナメルバッグがある。 足元にはイルカのぬいぐるみストラップの付いた、大きな黒のエ

「逢いたかったんです.....

荒くなった。 男の声が、 ひっそりと聴こえて来る。 やっぱりか。 — 瞬、 鼻息が

不尽だ。 俺だってキスしてえ。 .....畜生、どいつもこいつも青春しやがって。 ホントに人生は理

黙ったまま、自分がいつも使っているシューズを手に取る。 と音が出てしまった。 こと

みるみるうちに、 とその背中がこちらを見る。 真っ赤な顔になる鳥飼部長が近藤を認めた。

近藤は人差し指を立て、 唇の前に置く。 しっ

部長を手招く。

鳥飼は、 掌を丸めて鳥飼の耳に付けた。 ますます真っ赤な顔になって、 「何してんっすか」 近藤の目の前に立つ。

トカットで童顔、 話しながら、 壁の突き当たりにいる女性を見た。 しかも爆乳。 低身長、 ショー

教師は真っ赤になって俯いた。 あんなんどこで口説くんだ。 許せん。 近藤の視線を感じたのか、

「近藤こそ」

「俺はコレ」

アップシューズを見せた。

・ 俺 も」

嘘つき。 まあいいです。 とりあえず、 あと5分帰るの待ってて下

い

「何で?」

村田さんと一緒だから。それとも、 知られたいの?」

息を一つする。 鳥飼が首をブンブン横に振った。フン。 鳥飼の目を見ながら、 鼻

そして体をレジの方に向けて言った。

村田さんごめんね。すぐ行く」

かける。 歩きながら、 レジで会計を済ませた後、 確実に陽が短くなっている事を感じた。 由佳の許しを得て再び手をつなぐ。 由佳に話し

'どっか寄る?」

「うん」

「よかった」

ふたりで喫茶店に入り、アイスコーヒーを頼んだ。

「ごめんね、今日は自習中止にしちゃって」

由佳が顔をほころばせた。

「ううん」

「いつも村田さんが家に着く時間くらいまで、 一緒にいてもいいか

7.

自分だけじゃない。 一分でも一秒でも、 好きな人と一緒にいたい。 考える事は皆同じ。

うん」

よかった。.....あのCD、聴いてる?」

「聴いてる.....、寝る前とか」

「そっか」

「 すぐ寝ちゃうの.....。 すごく落ち着く」

「へえ、よかった」

うん、と由佳が頷く。 ふたりの目の前に、 アイスコーヒー が置か

れた。

「こ、近藤くん、さっき」

-ん?

「奥に、誰かいたの?」

る 口に含んだアイスコーヒーを噴き出しそうになった。 首を横に振

お話する声が聴こえたから....

Ú 独り言」

..... そう?」

由佳が珍しく、 怪訝な顔をした。

迷うんだよね。 いつも買う時」

そうなんだ」

でも結局、 いつもと同じアップシューズを買っちゃうの」

ふふっ、 と由佳が笑った。 可愛いな.....。

村田さんは、 笑うとえくぼが出来るんだね」

えっ

両方とも出来てるよ」

そうなの?」

たった今、そんな事を初めて知りました、 みたいな顔をしている。

うん、 両方とも」

前までは無かったような気がする」

そうじゃないだろ.....。近藤は首を振る。

ついつい、言わなくてもいいような事まで、 言ってしまう予感の

可愛いね」

流れを振り払う。

由佳が真っ赤になって下を向いた。

そつ、そ、 そんな事」

近藤が対面から、 腰を浮かせて覗き込む。

あるし」

由佳が下を向いたままで答える。 耳たぶまで赤い。

もう.....。 帰りたい」

· ほんと?」

う。 にやにやしながら追い詰めてみる。 由佳の事をそう思う。 なんてバランスの悪い人だろ

「ち、違うけど……」

めんね」と言ってみる。 近藤が屈託なく笑った。 それから由佳の頭を、 ぽんੑ と叩き「ご

「だって……」

見ている。 由佳が赤い頬で、 近藤の事を恨めしそうな、 恥ずかしそうな眼で

わ、私、自分でも少しだけ分かるの」

. ?

こ、近藤くんと一緒の時は」

「時は?」

「素直」

言った後、くすくすっと笑う。近藤も笑った。

「一緒だよ」

「うん」

「もうすぐ帰ろうか」

· うん」

喫茶店を出ると、 陽はすっかり落ちていた。 それでも、 空はまだ

明るい。

「あっ」

ぽっかり浮かんでいる。 由佳が指差した方向に、 近藤も眼を向けた。 紙のように薄い月が、

「時々、思う事がある」

ふたりで立ち止まって見ていた時に、 ぽつん、 と由佳の声が聴こ

えた。

「なにを?」

「近藤くんみたいに明るい人になりたい」

「そうかな」

、まだ遠いね、私」

言いながら月に手をかざす、 由佳の横顔が、 初めて幼く見える。

. んなこたあない。村田さんは明るくなった」

「ほんとかな」

ああ。一学期よりも人に関わるようになったじゃ

由佳が溜息をついた。

「よく見てるね。人の事」

見てるよ。一番後ろの席だもん、 クラスの全方位」

「そうなんだ」

学校での朝練が終わって、 制服へと着替えが終わると大体、 8 時

10分頃。

毎朝、由佳が登校してくるのが20分頃。

今日の由佳は.....。 頬が腫れてないだろうか。 眼元は腫れていな

いだろうか。

髪の毛が引っ張られて、くちゃくちゃになってないだろうか。

無理して笑ってないだろうか。 今日は大丈夫そうだ。 それから近

藤の一日が始まる。

だから.....。 もう学校をサボれない。 サヨナラ不真面目な俺。

そういえば私、 明旦、 日直だった。 思い出した」

「手伝ってあげるよ」

「いいの?」

「うん」

由佳を駅まで送り届け、 自分の家へと帰る道すがらの近藤は、 偶

然、武田を見かけた。

自分の祖父母なのか。 御年寄り夫婦らしき前を、買い物袋を7、

8個持ち、駅へと向かう。

道路の向こう側なので、武田は近藤には気が付いていないらしい。

いる。

時々、

御年寄り夫婦に声を掛けて、歩く速度を緩めていたりして

と思った。 点り始めた電灯が、 武田の顔を照らす。 顔つき.....。 変わったな、

ていた。 頑張れよ.....。 心の中で呼び掛けて、 近藤は立ち止まって見送っ

三人の姿が見えなくなるまで。

## 近藤(18(後書き)

が鳥飼部長と爆乳教師の馴れ初めとか書いています 実はノクターンの中で「彼女のおっぱいは僕のもの!」という作品

読んでみたいかなー? といいますか、もしもこちらで需要があれば改変して掲載します。 18歳以上になったら読んでくださいね。 と思った方は、 遠慮なく仰ってくださいね。

ノクタ版「近藤19」を少し変えてお送り致します。

行く。 県大会が、 あと10日に迫っていた。 当 然、 練習は苛烈になって

なくはない。 今迄、中長距離の練習ばかりしていた近藤には、 正直キツい所も

未練を断ち切る為に、 昨日の夜はスパイクを片付けた。

尚更だ。 3 0 0 0以上はアップシューズの方が向いている。 5000なら

少なくとも、近藤はそう思う。

下手したら、大会迄にもう一足、 要るかもしれない。

体の方は、合宿中、慣らしていたのが良かったと思う。

コツが何となくつかめる様になった。一度それを、体に「ぽん」

と覚えこませたら楽だ。

大会までに仕上げておきたい、石井顧問と自分で決めた課題があ

た

くるだろう。 足を真下に着く事。 これが出来るようになったら、 記録も違って

本音を言えば、 この頃は家に帰ったらすぐに寝たい。 出来れば。

たい。 出来れば でも我慢だ。 由佳の帰りの時間まで、 一緒に布団にもぐり込み

のが分かるから。 自分が隣にいる時だけだけど、 少しずつ、 心を開いてくれている

だから、毎日の自習は続ける。土日を除いて。

そんな風に近藤と由佳は、 淡々と過ごしている。

でになった程度だった。 変わった事と言えば、 ふたりで過ごす自習時間が、 午後6時半ま

理电。 近藤の母親と亜紀子が、帰宅してくる時間が、 30分延びたのが

こしている。 二学期になってからの由佳は、 部活が終わる頃まで、 図書室で過

どちらかが先に座っていたら、どちらかが横に座る。 ひとつ椅子を空けた隣には、大概、 横山がいた。

遣わずにいられた。 お互いに何の断りもないし、どちらが先に帰っても、互いに気を

った事もなかった。 図書室、という場所で、 わざわざ声を出して話したい程、 切羽詰

そのバランスが崩れる時もある。でも、ごくたまに。

何気なしに、そちらの方向に顔を上げる。 携帯電話を二つに折る音が、入り口辺りで、 由佳が気象の本を、ぱらぱらとめくっているところだった。 したような気がした。

来た。 眼を真っ赤にした横山が、 唇を真一文字にして、こちらへやって

「屋上」「いいよ」「由佳、ちょっといい?

からこぼれ落ちそうだ。 眼に涙が、 一杯溜まっ ている。 瞬き (まばたき) したら、 その眼

先に行ってて。 すぐ行くね」

頷きもせずに横山が、 くるっと背中を向けて急ぎ足で去って行く。

嫌味な胸騒ぎがする。

由佳は静かに本を戻し、 図書室を出る。

くっつける。 隅のセロテープが茶色くなっている。 階段の踊り場で「足元注意」貼紙が、 ぱん 剥がれそうになっていた。 と掌で押さえて壁に

ていた。 屋上へと抜ける鉄の扉の前、 横山が体育座りになってうずくまっ

まみちゃん」

がって扉を開けた。 声を掛けた。 横山が、 こちら側に顔を見せずに、 ゆっくり立ち上

てく歩く。 風は無い。 横山の背中を見ながら、 他には誰もいない屋上をてく

横山が振り返る。

私の家、 もうダメかもしれない」

ſΪ 頬に、 涙が後から後から、 こぼれ落ちて行く。 由佳は何も言えな

さっき、ママから電話があったの」

「うん」

「協議離婚になると思う....って」

「うん」

「疲れちゃった」

みたいに。 由佳が黙って横山の左手を握り締めた。 近藤が、そうしてくれる

私、ママの事もパパの事もすごく好きなのに」

「うん」

予想はしてたけど、それが現実になって行くのって、 つらいね」

横山が、すん、と洟をすする。

「私は」

-?

・まみちゃんの信じる通りにしたらいいと思う」

うん

た。 ふたりで、校庭が見える位置に並んで座った。 スズメの鳴き声がする。 しばらく黙ってい

世間では、よくある話なのかなあ.....」

「よくわかんない.....。うちみたいな親もいるし」

た。 横山の話だと、 成人になるまでの親権は父親になるという事だっ

でも、お母さんとは逢えるんでしょう?」

校庭を走る豆粒みたいな陸上部員を眺めながら、 横山が答えた。

「まあね.....」

「そっか」

「うん」

るのが見えた。 豆粒男子の集団が、すぐに固まってパンチだのキックだのしてい

もないのかもしれない。 見ている方は、 ハラハラする。でも多分、そんなに心配する事で

いいな、男子って」

横山が言った。由佳は頷いた。

カラッとしてるよね.....」

どうすればあんな風になれるんだろうね?」

由佳は返答に詰まった。自分でも、 いつも思ってる事だから。

人に拠るのかなあ.....」

そういうものなのかなあ.....」

ぽつんぽつんと交わす会話を、 吹いて来た秋の風が邪魔をする。

まみちゃん」

· なあに?」

こちらを向いた横山の頬に、 もう涙は無かった。

強いなあ.....。由佳は素直に思う。

ゎ 私ね。 こないだね。こ、こ、 近藤くんに言われたんだ」

え、偉いって」 「家で暴力を振るわれても、 ちゃんと学校に来ている村田さんは、

「そう」

横山が校庭を見ながら、にっこり笑った。

· わ、私も、まみちゃんに同じ事を、お、思う」

· そうかなあ」

私 まみちゃんの事、すごく強いし、 所懸命な人だと思う」

言いながら由佳の方が泣けてきた。

ごめんね由佳。由佳の方が大変なのに」

横山が、由佳の肩を撫でた。

その掌は温かい。

社会的立場どうこう、で言ったら、 まみちゃんの方がキツいかも」

「じゃ、お互い様って事で」

に言いながら。 顔を見合わせ、 どちらともなく笑い出した。 娘はツライよ、 ロ 々

豆粒が、 ホイッスルの音で綺麗に並び、 それからバラバラになる。

部活、終わっちゃったね」

うん。もう少し見ていたいんだけどなあ.....

横山の意外な言葉に、由佳は少しだけ驚く。

「誰を?」

秘密」

何で?」

何となく想像はついた。横山が赤くなる。

だめ。内緒」

うん。まみちゃん、降りようよ」

「そうしよっか」

校門までは一緒にいた。

自分とは違う路線の駅に向かう横山の背中は、 か細くて頼りない。

父母が心の通っていない家庭に帰る事ほど、子供にとっては辛い

ものは無い。

由佳には一度、 中学一年の時に「死にたい」と小テストの答案に、

書き殴った事がある。

あの時は母が教師に呼び出された。 家に帰ってからは嫌味の嵐だ

た。

もう二度と、あんな思いはしたくない.....。

村田さん、お待たせ。ごめんね」

## 19 (後書き)

ませんが どうしても文章自体は変えられず、改行程度しか手を加えてはおり

します。 だいぶ読みやすくなったと思います。今後とも、よろしくお願い致

## PDF小説ネット発足にあたって

ビ対応 行し、 など 公開できるように 小説家になろうの子サイ 部を除きイ 最近では横書きの F小説ネッ の縦書き小説 の縦書き小説 います。 ンタ そん をイ を思う存分、 たのがこ な中、 ネッ 書籍も誕生しており、 タテ書き小説ネッ ト関連= 誰もが簡単にPDF形式 ネッ て誕生しました。 ト上で配布す 小説ネッ 横書きという考えが定着しよ てください。 トです。 既 存書籍 は 2 の タ 0 いう目的の 07年、 の電子出版 小説を作成 小説が流 ンター

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。 http://ncode.syosetu.com/n0260x/

放課後、彼女にキスしよう~あなたを誰より愛してる!

2012年1月5日01時54分発行